

史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅱ

—福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城の第12次～第16次調査—

2014

行橋市教育委員会



中門跡



1. 西門跡



2. 第2東門跡

序

本市は、周防灘に臨む^{みやこ}京都平野の中央に位置し、古くは「みやこ」という呼称に示されるように、「^{とよ}豊の^{くに}国」の中心として栄えてきました。市内にはそれを物語る多くの史跡が遺されており、本市ではこれらの文化財を活かした個性と潤いのあるまちづくりを積極的に推進しているところです。

なかでも御所ヶ谷神籠石は、昭和 28 年に国の史跡に指定された本市を代表する文化財であり、史跡周辺の豊かな自然とを融合させた「御所ヶ谷史跡自然公園」の整備に向けて、平成 5 年度より 16 次にわたる調査を行ってまいりました。

本書は、平成 20 年度から平成 24 年度までの調査成果をまとめたもので、御所ヶ谷神籠石の発掘調査報告書としては通巻 2 冊目になります。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

おわりに、調査にあたり快くご協力いただきました地権者のみなさま、地元の津積区、ご指導いただきました指導委員の先生方、文化庁、福岡県教育委員会、九州歴史資料館の関係各位に心よりお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

行橋市教育委員会
教育長 山田 英俊

例 言

1. 本書は、福岡県行橋市大字津積に所在する、国指定史跡 御所ヶ谷神籠石の発掘調査報告書である。国、県の補助を受け、平成 20 年度から平成 24 年度の 5 ヶ年にわたり調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。
3. 遺構実測は池永友美、今村美香、工藤祥子、佐藤愛子、島木邦子、田中すま子、谷口貞子、中島裕子、永本啓子、古木初子、山口佳織、山口裕平、渡邊知栄が行った。
4. 遺構写真は山口裕平が撮影した。
5. 遺構図面の整理は山口裕平が行った。
6. 遺物の整理・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。
7. 遺物実測は定野美津子、山口裕平が行った。
8. 遺物写真は山口裕平が撮影した。
9. 遺構・遺物図面の浄書は鎌田尚子、松尾留衣、松本まゆみが行った。
10. 西門跡の立面図は九州航空株式会社に委託し写真測量を実施し、平板測量等で補足した。
11. 本書に使用した方位は座標北である。
12. 本書に報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。
13. 本書の執筆および編集は、鎌田の協力を得て山口裕平が行った。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の経過（日誌抄）	2
(1) 第12次調査	2
(2) 第13次調査	3
(3) 第14次調査	3
(4) 第15次調査	3
(5) 第16次調査	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の記録	7
第1節 遺跡の概要と第1次～第11次調査の経過	7
(1) 遺跡の概要と発掘調査前史	7
(2) 第1次～第11次調査の経過	7
第2節 第12次～第16次調査の概要	10
(1) 第12次～第16次調査の概要	10
(2) 調査方法	11
第3節 北西外郭線東側の調査	11
(1) 調査の概要	11
(2) B3トレンチ	14
第4節 西門跡の調査	15
(1) 調査の概要	15
(2) B4トレンチ	17
(3) B5トレンチ	17
(4) B6トレンチ	17
第5節 第2東門跡の調査	22
(1) 調査の概要	22
(2) 北側壁	26
(3) 出土遺物	26
第6節 中門跡背面の調査	28
(1) 調査の概要	28
(2) 中門南東石塁	30
(3) 中門南西石塁	30
(4) 採集遺物	30
第7節 東石塁の測量調査	33
第4章 結語	35

図版目次

- 巻頭図版1 中門跡
- 巻頭図版2 1. 西門跡
2. 第2東門跡
- 図版1 御所ヶ谷神籠石周辺航空写真
- 図版2 1. 北から見た御所ヶ谷神籠石の山並み
2. 北上空から見た遺跡主要部
- 図版3 1. 北西外郭線遠景（北西から）
2. 北西外郭線より京都平野を望む（南から）
3. 北西外郭線の状況（南から）
- 図版4 1. B3トレンチ全景（北から）
2. B3トレンチ南壁土層
- 図版5 1. 東側石塁（北から）
2. 東側石塁遠景（北西から）
3. 西側石塁（北から）
- 図版6 1. 西側石塁遠景（北東から）
2. 背面東側石塁（西から）
3. 背面西側石塁（南東から）
- 図版7 1. 列石転用石材（南から）
2. 石塁断面（南東から）
3. 城内から望む（南から）
- 図版8 1. B4・B5トレンチ全景（南西から）
2. B4トレンチ全景（西から）
3. B5トレンチ全景（南から）
- 図版9 1. B5トレンチ南壁土層（北から）
2. B5トレンチ須恵器出土状況
3. 柱穴検出状況
4. 柱穴完掘状況
- 図版10 1. B6トレンチ全景（北西から）
2. B6トレンチ東壁土層（西から）
3. B6トレンチ北壁土層（南西から）
- 図版11 1. 第9次調査時の第2東門跡（北東から）
2. 第2東門北側壁（東から）
- 図版12 1. 北側壁の石積み1（南東から）
2. 北側壁の石積み2（南東から）
3. 遺物出土状況（東から）
- 図版13 1. 中門跡背面の状況（北から）
2. 西側谷筋にある花崗岩の露頭（西から）
3. 東側谷筋にある花崗岩の露頭（東から）
- 図版14 1. 中門南西石塁前面の花崗岩の露頭（南西から）
2. 節理が走る花崗岩の露頭（南西から）
3. 中門南東石塁前面の土壇状テラス（北西から）

図版 15	1. 中門南東石塁（北東から） 2. 中門南東石塁（北西から）
図版 16	1. 東側の石積み（北から） 2. 西側の石積み（北から） 3. 断面の状況（東から）
図版 17	1. 中門南西石塁（北から） 2. 中門南西石塁（北西から） 3. 東石塁（北西から）
図版 18	御所ヶ谷神籠石出土遺物

挿図目次

第 1 図	御所ヶ谷神籠石整備指導委員会
第 2 図	御所ヶ谷神籠石の位置（1/2,000,000）
第 3 図	行橋市の地質図（1/100,000）
第 4 図	京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）
第 5 図	御所ヶ谷神籠石全体図（1/4,000）
第 6 図	第 1 次～第 11 次調査の状況
第 7 図	北西外郭線西側地形測量図（北半部）（1/400）
第 8 図	北西外郭線西側地形測量図（南半部）（1/400）
第 9 図	B 3 トレンチ実測図（1/40）
第 10 図	西門跡周辺地形測量図（1/300）
第 11 図	西門跡前面石塁立面図（1/100）
第 12 図	西門跡背面石塁立面図（1/100）
第 13 図	B 4 トレンチ実測図（1/40）
第 14 図	B 5 トレンチ実測図（1/40）
第 15 図	西門跡出土須恵器実測図（1/3）
第 16 図	B 6 トレンチ実測図（1/40）
第 17 図	第 2 東門跡周辺地形測量図（1/400）
第 18 図	第 2 東門跡平面・立面・断面図（1/80）
第 19 図	第 2 東門跡遺物出土状況図（1/60）
第 20 図	第 2 東門跡出土土器実測図（1/3）
第 21 図	中門跡背面地形測量図（1/400）
第 22 図	中門南東石塁実測図（1/60）
第 23 図	中門南西石塁実測図（1/60）
第 24 図	中門跡背面採集土師器実測図（1/3）
第 25 図	東石塁実測図（1/60）
第 26 図	東石塁周辺地形測量図（1/400）

表目次

表 1	御所ヶ谷神籠石出土遺物観察表
-----	----------------

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

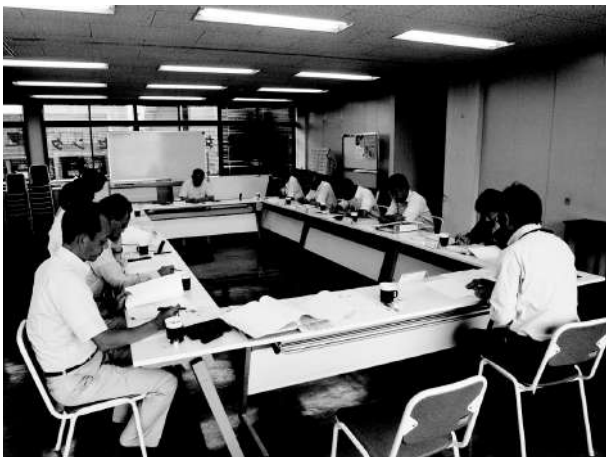
御所ヶ谷神籠石は昭和28年(1953)に国の史跡に指定されたが、当時はまだ遺跡の全容は十分把握されておらず、確認されていた点在する遺構を個別に指定したにすぎなかった。指定された遺構は中門跡、西門跡、東門跡の3つの城門、列石6箇所、西外郭線上にある「見張」と呼ばれる巨石、城内の「立岩」と呼ばれる巨石、「馬立場」の計12箇所で、指定面積もわずか10,800.1㎡であった。

その後、平成2年度に御所ヶ谷神籠石周辺の史跡自然公園構想が浮上し、続く平成3年度、4年度に文化庁の国庫補助を受け、史跡御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定事業を行った。この中で、指定地が狭小なことや公有化が未着手であることが問題点として挙げられたが、その作業の前提となる遺跡の実態を把握するための詳細調査の必要性が急務となった。このことから、平成5年度より文化庁と福岡県の補助を受け、御所ヶ谷神籠石の内容確認を行うため発掘調査に着手するとともに、史跡御所ヶ谷神籠石地域整備基本計画を策定した。発掘調査は平成15年度まで第11次にわたり継続的に行われ、その成果は平成18年3月に調査報告書としてまとめられている。この調査の概要は第3章第1節で後述する。この間、平成10年9月11日には、当時の勝山町と犀川町域(いずれも現在のみやこ町)を含めた431,594.9㎡が追加指定を受け、旧指定地と併せて442,475㎡が国指定史跡となった。平成11年度からは公有化事業にも取り組み、現在までに行橋市域の指定面積383,074㎡の約96.4%にあたる369,413㎡を公有化した。

平成20年度には文化財専門職員の増員を受け一時中断していた発掘調査を再開し、平成24年度までに第16次にわたる調査を行った。そして平成25年度に、第12次から第16次まで5箇年分の調査成果整理し報告書を刊行する運びとなった。

この間には、平成20年10月に神籠石所在自治体の連携を目的とした「神籠石サミット」を当市で開催し、神籠石の活用方策などについて活発な協議を行った。その中で御所ヶ谷神籠石を舞台に大規模な市民参加の見学会も催した。また平成22年度には先の保存管理計画や整備基本計画の見直しが求められ、新たに「史跡御所ヶ谷神籠石整備指導委員会」(委員長:小田富士雄福岡大学名誉教授)を立ち上げ、平成24年度には今後の整備の基本方針となる「整備基本設計」を策定した(第1図)。

なおこの5年間にわたる調査期間中には、上記委員会の視察のほか、文化庁や福岡県教育委員会文化財保護課、九州歴史資料館、古代山城所在自治体職員らの視察、平成24年3月には古代山城研究会第45回例会の巡見などがあり、多くの方から調査について指導や教示を受けることがあった。調査体制は次節に示す通りである。



委員会の席上



西門跡の現地視察

第1図 御所ヶ谷神籠石整備指導委員会

第2節 調査体制

現地調査（平成20～24年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	徳永 文悟	（平成22年10月8日まで）
		教育長	山田 英俊	（平成22年10月9日から）
		教育部長	尾畑 和敏	（平成20～21年度）
		教育部長	三角 正純	（平成22～24年度）
調査	教育部	文化課長	酒井 和宣	（平成20～22年度）
	教育部	文化課長兼文化財保護係長	小川 秀樹	（平成23～24年度）
	教育部	文化課長補佐兼文化財保護係長	同	（平成22年度）
	教育部	文化課 文化財保護係長	同	（平成20～21年度）
	教育部	文化課 文化財保護係	伊藤 昌広	
	教育部	文化課 文化財保護係	中原 博	
	教育部	文化課 文化財保護係	山口 裕平	（調査担当）
庶務	教育部	文化課 文化振興係長	辛嶋智恵子	
	教育部	文化課 文化振興係	北山久美子	（平成20年度）
	教育部	文化課 文化振興係	北田千砂子	（平成21～23年度）
	教育部	文化課 文化振興係	入生 佳奈	（平成24年度）

発掘調査作業員

赤波江静代 安藤 隆弘 安藤 征夫 池永 友美 今村 美香 大村 英幸 緒方 景俊
小野田トミエ 角田 義彦 門田 敏男 清原 敏伸 工藤 祥子 小渕八寿子
定野 記夫 佐藤 愛子 島木 邦子 新保 初枝 末永 修崇 田中すま子 谷口 貞子
中島 裕子 中村 良則 永本 啓子 古木 初子 松尾 公子 椋本 忠道 山口 佳織
山田 拓三 山本 要二 吉田 幸子 渡邊 知栄

報告書作成（平成25年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	山田 英俊	
		教育部長	三角 正純	
調査	教育部	文化課長兼文化財保護係長	小川 秀樹	
	教育部	文化課 文化財保護係	中原 博	
	教育部	文化課 文化財保護係	山口 裕平	（報告書担当）
	教育部	文化課 文化財保護係	中川 優子	
庶務	教育部	文化課 文化振興係長	辛嶋智恵子	
	教育部	文化課 文化振興係	田坂 彩	

整理作業員

枝吉 恵美 奥野 康代 鎌田 尚子 佐々木 豊子 定野 美津子 松尾 留衣 松本 まゆみ

第3節 調査の経過（日誌抄）

（1）第12次調査

平成20年12月15日（月）【曇り】	平板測量を行うための杭打ちを開始する。
本日より第12次調査を開始。北西側外郭線の伐採を開始する。	平成21年1月20日（火）【晴れ】
	12日目にして伐採が終わる。併せて杭打ちも終了する。
平成20年12月18日（木）【曇り】	平成21年1月27日（火）【晴れ】

平板測量を開始する。

平成 21 年 2 月 5 日 (木) 【曇りのち雨】

土塁の構造を確認するため、B 3 トレンチを設定する。

平成 21 年 2 月 18 日 (水) 【晴れ】

B 3 トレンチで版築土塁を確認する。

平成 21 年 2 月 26 日 (木) 【曇り】

写真撮影を行い、平面図、土層図の作成に移る。

平成 21 年 3 月 2 日 (月) 【晴れ】

小田富士雄福岡大学名誉教授来跡。調査指導を受ける。

平成 21 年 3 月 9 日 (月) 【曇り時々雨】

遺構実測が終了し、B 3 トレンチを埋め戻す。平板測量も完了し、第 12 次調査を終える。

(2) 第 13 次調査

平成 21 年 12 月 1 日 (火) 【曇り】

本日より第 13 次調査を開始。中門跡背面の伐採を開始する。

平成 22 年 1 月 20 日 (水) 【曇り】

伐採と並行して、平板測量を行うための杭打ちを始める。

平成 22 年 1 月 26 日 (火) 【晴れ】

8 日目にして伐採終了。平板測量に移る。

平成 22 年 2 月 3 日 (水) 【晴れ】

中門南東石塁、同 南西石塁の実測を始める。

平成 22 年 2 月 24 日 (水) 【晴れ】

平板測量が終了する。

平成 22 年 3 月 3 日 (水) 【曇り】

石塁遺構の実測が終了。主要遺構の写真撮影を行う。第 13 次調査を終える。

(3) 第 14 次調査

平成 23 年 1 月 18 日 (火) 【晴れ】

第 14 次調査では西門跡の確認調査を行う。伐採と杭打ちに分かれて作業を開始する。

平成 23 年 1 月 20 日 (木) 【晴れ】

杭打ちが終わった地点から、順次平板測量を開始する。

平成 23 年 1 月 21 日 (金) 【晴れ】

B 4 トレンチ、B 5 トレンチを設定し、平板測量と併行して掘り下げを始める。

平成 23 年 1 月 26 日 (水) 【晴れ】

B 5 トレンチの旧表土中で須恵器塚が出土する。

平成 23 年 2 月 7 日 (月) 【晴れ】

両トレンチの写真撮影を行い、遺構実測図の作成に移る。

平成 23 年 2 月 18 日 (金) 【曇り】

平成 22 年度第 2 回の整備指導委員会を開催。

平成 23 年 3 月 8 日 (火) 【晴れ】

平板測量が終わる。

平成 23 年 3 月 31 日 (木) 【晴れ】

遺構実測を終えトレンチを埋め戻す。第 14 次調査を終える。

(4) 第 15 次調査

平成 23 年 12 月 16 日 (木) 【曇り】

第 15 次調査を開始する。昨年に引き続き西門跡の確認調査と中門跡背面の補足調査を行う。

平成 23 年 2 月 20 日 (月) 【晴れ】

中門跡背面の平板測量を開始する。また西門跡に B 6 トレンチを設定、掘り下げを始める。

平成 23 年 2 月 24 日 (金) 【晴れ】

B 6 トレンチの掘り下げが終了し、遺構実測に移る。

平成 23 年 3 月 19 日 (月) 【晴れ】

B 6 トレンチの写真撮影を行う。

平成 23 年 3 月 26 日 (月) 【晴れ】

中門跡背面の補足調査が終了する。

平成 23 年 3 月 29 日 (木) 【晴れ】

B 6 トレンチの遺構実測が終了する。トレンチを埋め戻し、第 15 次調査を終了する。

(5) 第 16 次調査

平成 24 年 1 月 30 日 (水) 【晴れ】

本日より第 16 次調査を開始。西門跡の写真測量を行うため、周辺の伐採を始める。

平成 24 年 2 月 7 日 (木) 【晴れ】

西門跡の伐採作業が終了する。東石塁の実測調査を始める。

平成 24 年 2 月 13 日 (水) 【晴れ】

西門跡の調査から第 2 東門跡の補足調査に移る。

平成 24 年 2 月 28 日 (木) 【曇り】

西門跡石塁の写真測量を行う。

平成 24 年 3 月 8 日 (金) 【晴れ】

第 2 東門跡の崩落した石材をはずし始める。

平成 24 年 3 月 19 日 (火) 【晴れ】

東石塁の実測作業が終わり、写真撮影を行う。

平成 24 年 3 月 21 日 (木) 【晴れ】

第 2 東門跡の掘り下げが終了し、写真撮影を行う。その後遺構実測に移る。

平成 24 年 3 月 28 日 (木) 【晴れ】

平成 24 年度の整備指導委員会が開催され、委員の先生方が現場視察を行う。

平成 24 年 3 月 29 日 (金) 【曇り】

第 2 東門跡の遺構実測を完了する。埋め戻しを行い第 16 次調査を終了する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第2図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,823人（平成25年12月末日現在）を擁す。

市域は京都平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、覗山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。

市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峽川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

御所ヶ谷神籠石の立地する山塊は花崗岩からなる。行橋市域には北部九州東部花崗岩類に属する真崎花崗岩と平尾花崗閃緑岩が分布し、御所ヶ谷神籠石は前者の分布域に属する（第3図）。すぐ北麓には平尾花崗閃緑岩や周防変成岩が分布するが、神籠石の列石や石塁にはすべて真崎花崗岩が用いられている。

一方植生に目を移すと、馬ヶ岳―御所ヶ岳山塊は花崗岩の風化に由来する酸性の貧養地でその発達は良好ではないが、中門跡を中心としたアカマツ疎林の中には、ヒモヅルやコブシ、タムシバ、ナツハゼ、ケナシアオハダなど分布上注目される種が散見される。なかでもヒモヅルは、熱帯アジアに分布するヒカゲノカヅラ科のシダ植物で、御所ヶ谷における分布は九州における北限域を形成する。その希少性から「御所ヶ谷のヒモヅル自生地」として平成24年3月26日に福岡県の天然記念物に指定された。

第2節 歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかっている。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延



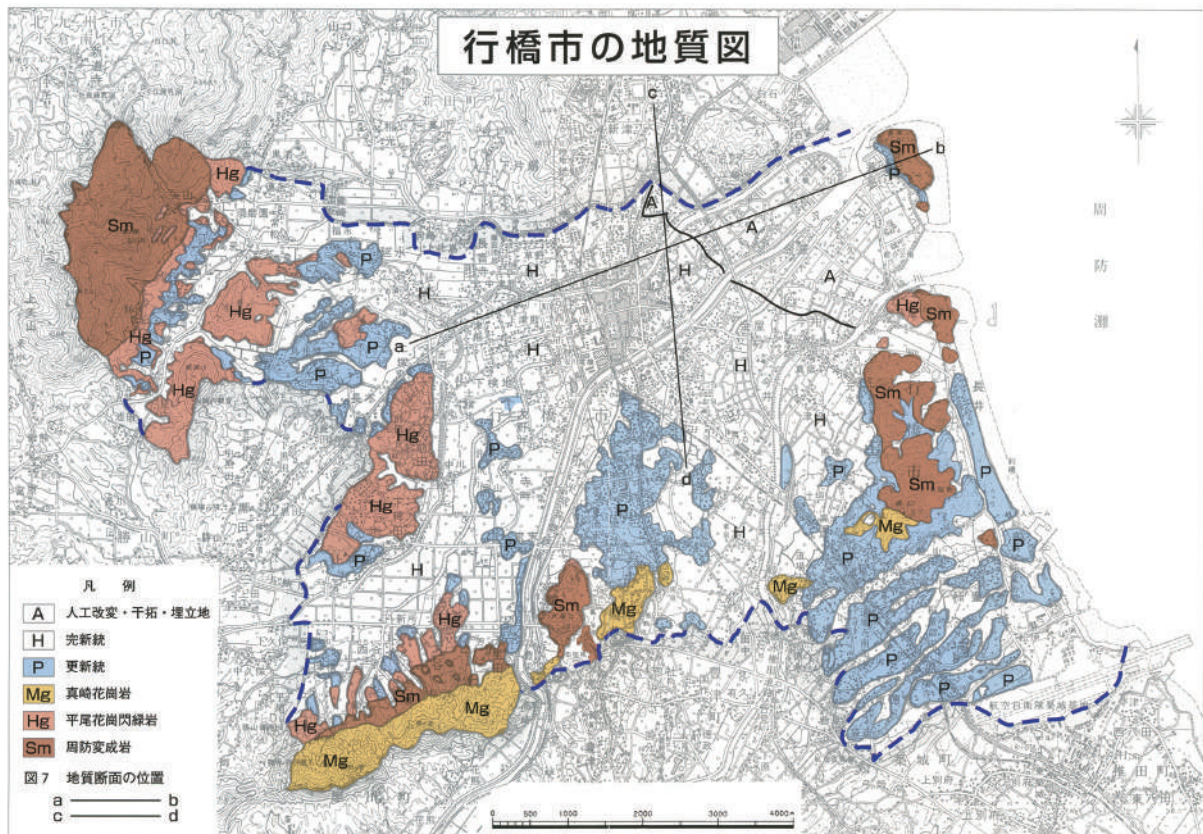
第2図 御所ヶ谷神籠石の位置（1/2,000,000）

永—津熊—大橋—今井—津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、葦島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第4図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、草期の押型文土器、後期の西平式系土器など各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

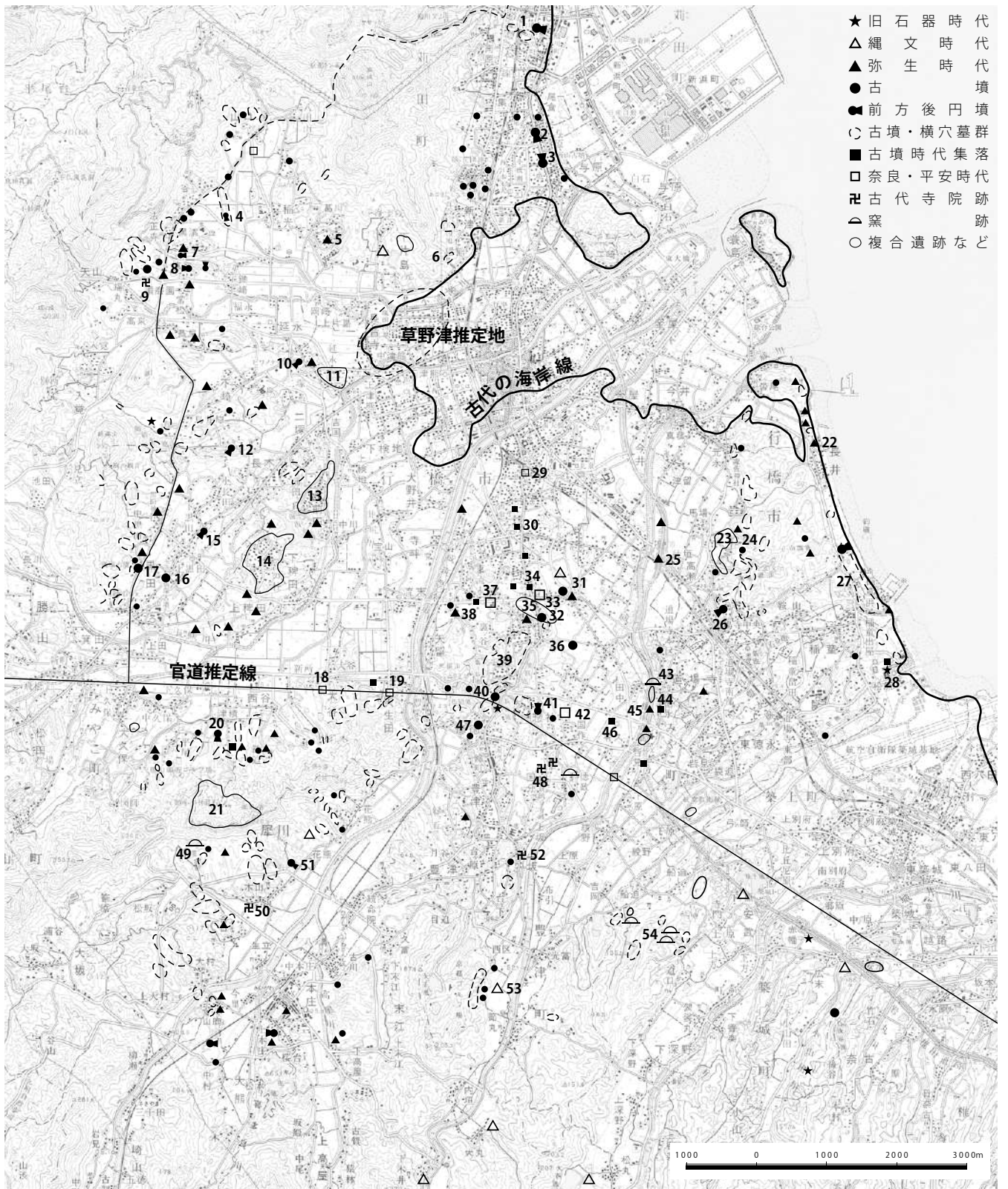
2500年前頃を境に、生業の主体と狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。またこの時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廃寺が建立された。またこの頃、本書報告の古代山城遺跡である御所ヶ谷神籠石が、対大陸・半島情勢の悪化に伴い築かれたとされる。

当該期では、近年に行われた東九州自動車道建設に伴う発掘調査で重要な調査成果が挙げられている。なかでも泉地区に所在する福原長者原遺跡では東西幅約150mの区域をもつ8世紀前半の官衙遺跡が確認され、奈良時代における豊前国府の可能性も指摘されている。延永地区の延永ヤヨミ園遺跡でも7世紀後半から8世紀代の官衙的な大型掘立柱建物群や区画溝、道路状遺構の調査が行われ、京都郡大領を示すと考えられる「京都大」墨書須恵器や「天平六年」（734）の銘をもつ木簡などが見つかった。付近に置かれた「草野津」との関連も指摘されており、今後の研究の深化が期待される。



第3図 行橋市の地質図 (1/100,000)



- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 石塚山古墳 | 2. 番塚古墳 | 3. 御所山古墳 | 4. 谷遺跡 | 5. 神後古墳 | 6. 葛川遺跡 |
| 7. 猪熊古墳群 | 8. 黒添メウト塚古墳 | 9. 徳永丸山古墳 | 10. 椿市廃寺 | 11. ビワノクマ古墳 | 12. 延永ヤヨミ園遺跡 |
| 13. 八雷古墳 | 14. 前田山遺跡 | 15. 下稗田遺跡 | 16. 庄屋塚古墳 | 17. 橋塚古墳 | 18. 綾塚古墳 |
| 19. 大谷車堀遺跡 | 20. 天生田大池遺跡 | 21. 片峰1号墳 | 22. 御所ヶ谷神籠石 | 23. 長井遺跡 | 24. 代遺跡 |
| 25. 馬場代2号墳 | 26. 辻垣遺跡 | 27. 隼人塚古墳 | 28. 稲童古墳群 | 29. 渡築紫遺跡 | 30. 崎野遺跡 |
| 31. 福富小畑遺跡 | 32. 侍塚遺跡 | 33. ヒメコ塚古墳 | 34. 鬼熊遺跡 | 35. 福原長者原遺跡 | 36. 矢留堂ノ前遺跡 |
| 37. 竹並遺跡 | 38. 甲塚方墳 | 39. 惣社古墳 | 40. 豊前国府跡 | 41. 居屋敷窯跡 | 42. 鋤先遺跡 |
| 43. 徳永川ノ上遺跡 | 44. 京ヶ辻遺跡 | 45. 彦徳甲塚古墳 | 46. 豊前国分寺跡 | 47. 徳政瓦窯跡 | 48. 岩見樋ノ口遺跡 |
| 49. 福六瓦窯跡 | 50. 木山廃寺 | 51. 姫神古墳 | 52. 上坂廃寺 | 53. 節丸西遺跡 | 54. 船迫窯跡群 |

第4図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

第3章 調査の記録

第1節 遺跡の概要と第1次～第11次調査の経過

(1) 遺跡の概要と発掘調査前史

御所ヶ谷神籠石は行橋市津積、みやこ町勝山大久保・同 犀川木山にまたがる古代山城遺跡で、行橋市域では唯一の国指定史跡である(第5図)。標高246.9mの御所ヶ岳の北から西側斜面にかけて版築土塁を主体とした外郭線が約3kmにわたってめぐり、北西側は墨線が二重になる複郭構造となる。城域に谷を取り込む包谷式山城で、谷部に城壁がめぐるところは石塁を設ける。特に中門跡には突出する暗渠(通水溝)をもつ石塁があり、日本の古代山城を代表する遺構として著名である。城門は谷部や尾根の暗部に位置し、現在7ヶ所が知られる。遺跡中央の丘陵上は現在景行神社が鎮座するが、その社殿脇に4間×5間の礎石総柱建物がある。御所ヶ谷神籠石で確認されている唯一の建物跡である。また馬立場と称される石塁遺構の背面は湿原となっており貯水池の跡と考えられている。

遺跡の存在は江戸時代前半には知られており、福岡藩儒・貝原益軒の『豊国紀行』(元禄7年:1694)などに記載がある。その多くは『日本書紀』にみられる景行天皇の熊襲征伐時の行宮とする考えであった。明治31年(1898)に小林庄次郎が高良山(福岡県久留米市)にある列石遺構を「神籠石」として中央の学界に紹介して以後、この種の遺跡が神域(霊域)であるか、城壁とみるかで激論が交わされるようになる。これがいわゆる「神籠石論争」で、その過程で御所ヶ谷神籠石は代表的な神籠石遺跡として認知されるに至った。その嚆矢が伊東尾四郎による踏査報告⁽¹⁾である。伊東は列石を確認し、当時知られていた中門跡、西門跡などの遺構の概要を報告した。昭和8年(1933)には当時の稗田村が文化財指定申請のための遺構実測調査を行い、昭和28年には御所ヶ谷神籠石として国史跡に指定された。戦後、1960年代におつば山神籠石(佐賀県武雄市)や山城山神籠石(山口県光市)などの発掘調査が行われ、神籠石が古代山城遺跡であることが明確になったが、御所ヶ谷神籠石でも郷土史家の定村責二⁽²⁾や石田孝⁽³⁾らの踏査により、列石上の土塁の存在が指摘され、第2東門跡の発見にも繋がった。1990年代以降には向井一雄らの踏査⁽⁴⁾により新たに城門などが発見されるに至っている。

(2) 第1次～第11次調査の経過

行橋市教育委員会では平成5年度より発掘調査に着手し、平成15年度まで継続的に調査を行ってきた(第6図)。調査次数は11次にわたり、平成18年度には調査成果をまとめた報告書を刊行した。以下に年次ごとの概要を記す。

平成5年度(第1次調査)

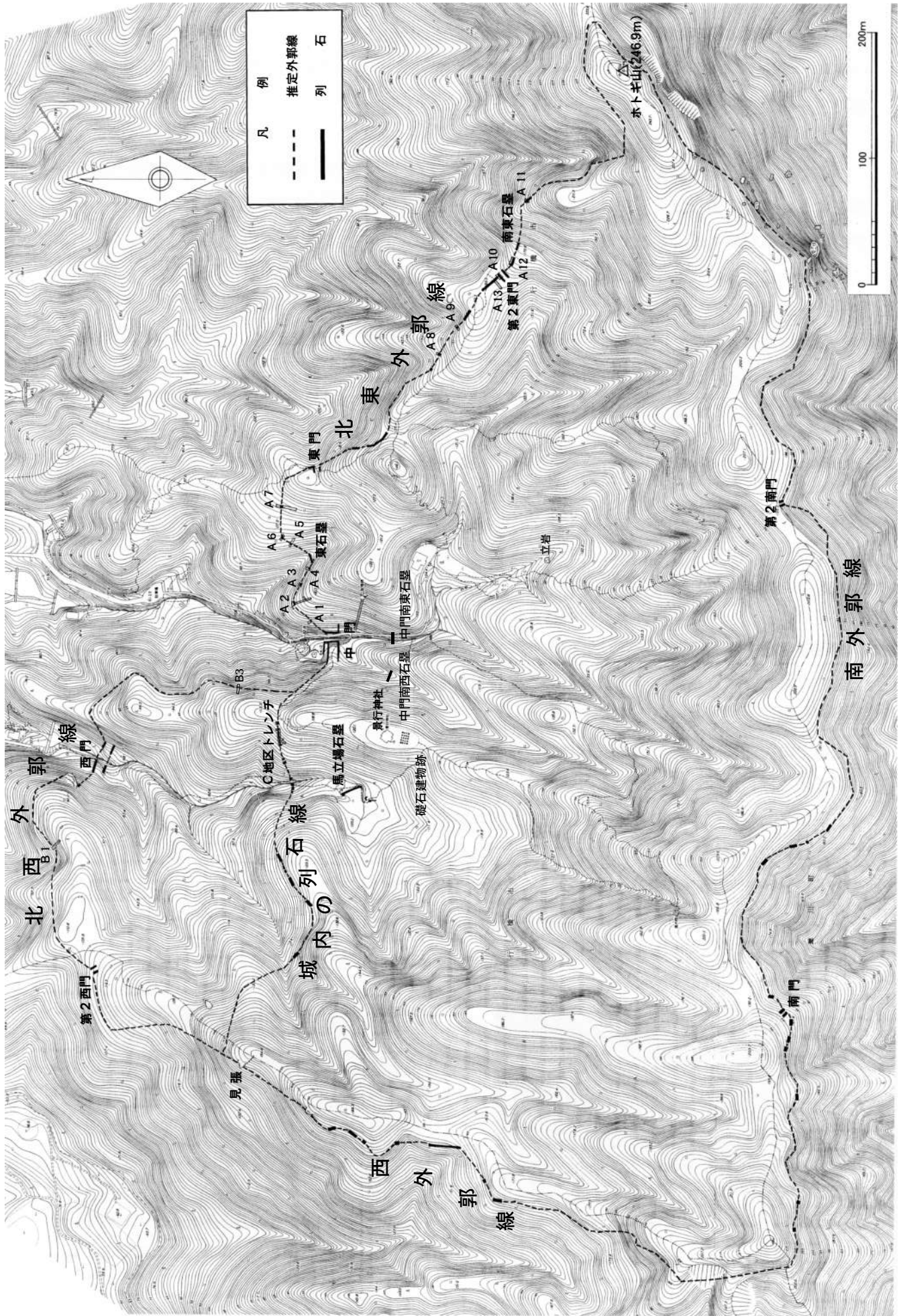
行橋市域の外郭線を確認するため土塁推定線を伐採、トレンチを設定。列石と版築土塁、柱穴群を確認する。列石は版築土塁に被覆され露出していないことが判明した。第2東門跡ではA10トレンチで須恵器長頸壺片が出土。また西門西側の北西外郭線で版築土塁を確認した。併せて遺跡内の7地点にGPS測量により調査用3級基準杭を設置した。

平成6年度(第2次調査)

北東外郭線の継続調査。A2トレンチで版築土塁内の柱跡を確認。北西外郭線のB1トレンチで列石を持たない版築土塁を確認。

平成7年度(第3次調査)

外郭土塁線の継続調査。また城内列石線の分布調査を実施。その後トレンチ調査(C地区)を開始する。



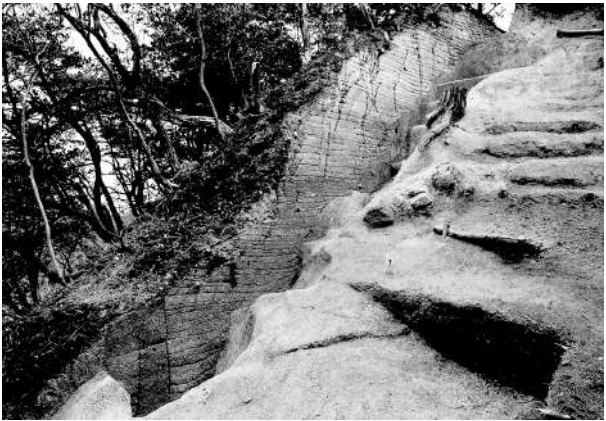
第5図 御所ヶ谷神籠石全体図 (1/4000)



列石と土塁（東門跡南側）



版築土塁と列石（A2トレンチ）



列石を用いない土塁（B1トレンチ）



城内列石線（C地区）



東門跡



景行神社の礎石建物跡



馬立場石塁



ヒモヅル（福岡県指定天然記念物）

第6図 第1次～第11次調査の状況

平成8年度（第4次調査）

西外郭線と南外郭線確認のため、勝山、犀川両町の協力を得て地形測量を実施。これにより遺跡の範囲を確定。C地区の調査を継続し、景行神社周辺の地形測量を行い礎石建物跡のトレンチ調査を実施する。

平成9年度（第5次調査）

礎石建物跡の継続調査。景行神社の石祠の実測。発掘調査の概要報告書を刊行する。

平成10年度（第6次調査）

C地区のトレンチを拡張し周辺の地形測量を実施。ラジコンヘリコプターで中門跡、城内列石線、礎石建物跡の空中写真撮影を行う。第2東門跡の調査を再開。

平成11年度（第7次調査）

中門跡から東門跡へ至る外郭線の地形測量を実施。第2東門跡周辺の地形測量を行う。

平成12年度（第8次調査）

第2東門跡の継続調査。C地区のトレンチを拡張し、新たに柱穴を確認。

平成13年度（第9次調査）

第2東門跡の調査を継続。崩落石材を除去しながら門道床面を検出する。また空中写真撮影を行う。

平成14年度（第10次調査）

第2東門跡と周辺部の補足調査。土塁背面の柱穴列を確認する。南東石塁の実測調査を行う。また東門跡の調査を開始する。

平成15年度（第11次調査）

東門跡の継続調査を行う。

註

- (1) 伊東尾四郎 1908「豊前京都郡の神籠石及石門に就きて」『歴史地理』第11巻第5号 日本歴史地理学会
- (2) 定村貴二 1983「御所ヶ谷神籠石」（小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』（日本城郭史研究叢書10）名著出版）
- (3) 石田孝 1981「神籠石は祭祀施設である」『筑紫』第91・93・94号 筑紫古代文化研究会
- (4) 向井一雄 1992「御所ヶ谷山城新発見遺構について—新たに発見された二つの城門跡—」『溝婁』第2号 古代山城研究会

第2節 第12次～第16次調査の概要

次節以降の調査報告に先立ち、ここでは5箇年の調査概要について述べる。併せて調査方法について記しておく。

(1) 第12次～第16次調査の概要

調査の経過は第1章第3節で年次を追って記したが、次節以下の調査報告は煩雑さを避けるため、年次に分けて遺構ごとに記述することにする。

なお調査は遺跡の確認調査という趣旨から現状把握を第一とし、遺構の現況をそこなう発掘調査は最小限に留めた。第2東門跡のみ復元的修理を前提としたことから、門道面のほぼ全域を調査した。

外 郭 線 中央丘陵上の外郭線分岐点より西門に至る北西外郭線東側の伐採および地形測量、トレンチ調査

城 門 西 門 跡：地形測量およびトレンチ調査、石塁の写真測量
第2東門跡：発掘調査

中門跡背面 伐採および地形測量、中門南東石塁と中門南西石塁の実測調査

そ の 他 東石塁の実測調査

(2) 調査方法

5箇年で行った調査は主に地形測量とトレンチ調査、遺構の実測調査に分けられる。

まず地形測量にあたっては、調査対象地の自然環境に十分配慮した上で、雑木を伐採、下草刈りを行った。その後調査用3級測量基準杭を用い、光波トランシットで基準杭を設定した。座標軸は日本測地系(旧座標)を用いた。地形測量は基準杭に平板を据え、縮尺100分の1の精度で行った。コンターラインは0.25mの間隔で計測し図示した。用いた方位は座標北である。

遺構の確認調査はトレンチ(試掘溝)を用いた。トレンチの掘り下げはすべて人力で行った。掘り下げ後に壁面を分層し土層観察を行い、縮尺20分の1で平面図、土層図等を作成した。必要に応じて縮尺10分の1での実測も行った。土層の色調の判別には土色帖(小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1995年版)を使用した。

なおトレンチの写真撮影は、35ミリ白黒フィルム、35ミリカラーリバーサルフィルムで調査の進展に従い順次行った。また補助的にデジタルカメラでの撮影も行った。

第3節 北西外郭線東側の調査

(1) 調査の概要(第7・8図、図版3)

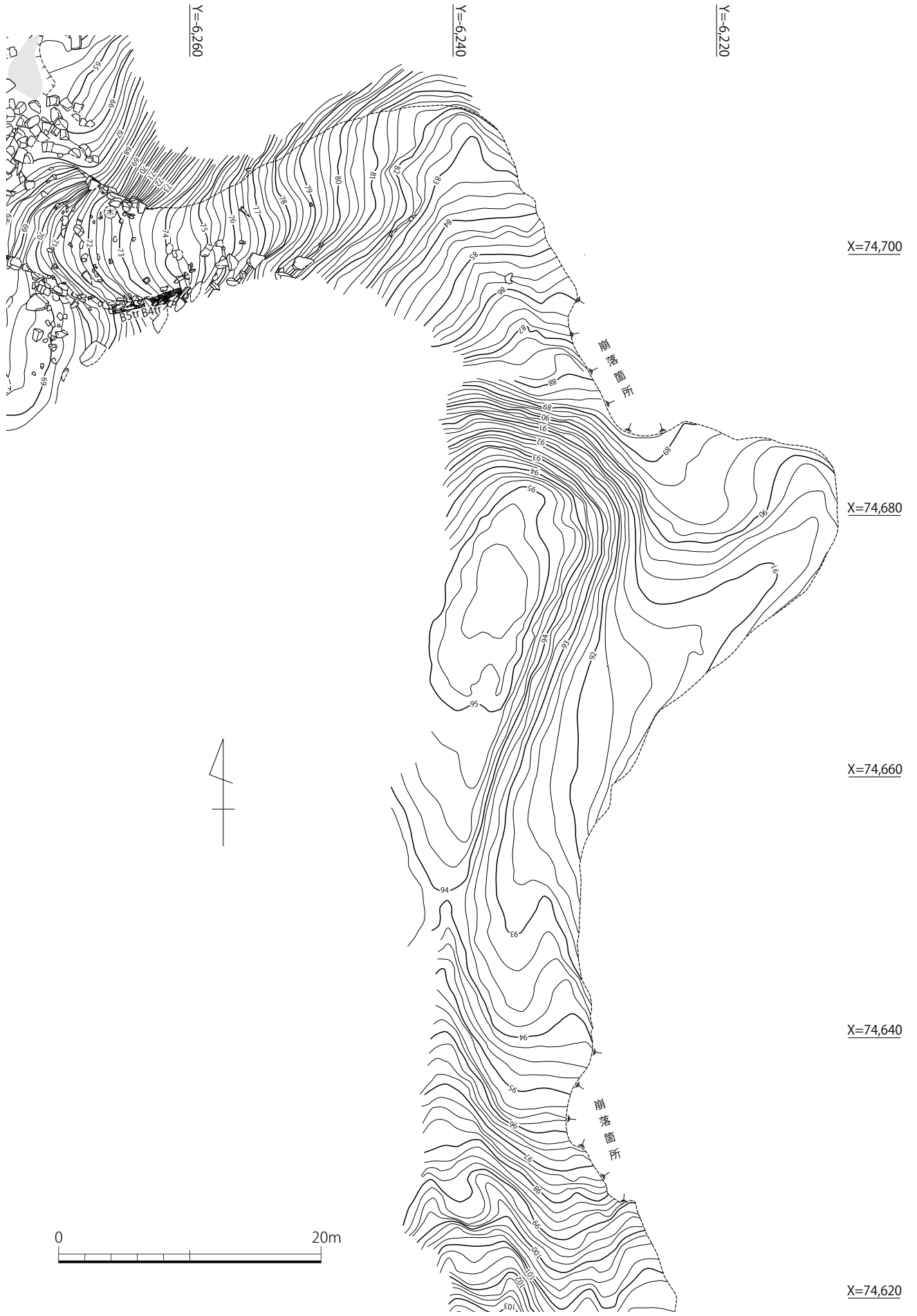
外郭線の調査は遺跡の範囲確認のため調査開始以来最も優先して行ってきた。第12次調査では、まだ地形観察が十分でなく測量調査を行っていなかった、中門跡西側分岐点から北向きに西門跡へ至る北西外郭線の東側の調査を行った。

伐採の結果、分岐点から北側にのびる内托式の土塁線が明瞭となった。測量調査は城外側は垂直に近い傾斜をもつため、土塁の天端とその背面に残る自然地形を中心に行った。その結果、分岐点から西門跡までの総延長は約210mで約42mの比高差を持つことが分かった。分岐点から約70mの標高94～99m地点、約150mの標高86～89m地点の2箇所土塁が滑り落ちていることを除けば、全体的によく旧状を保っていることがうかがえる。

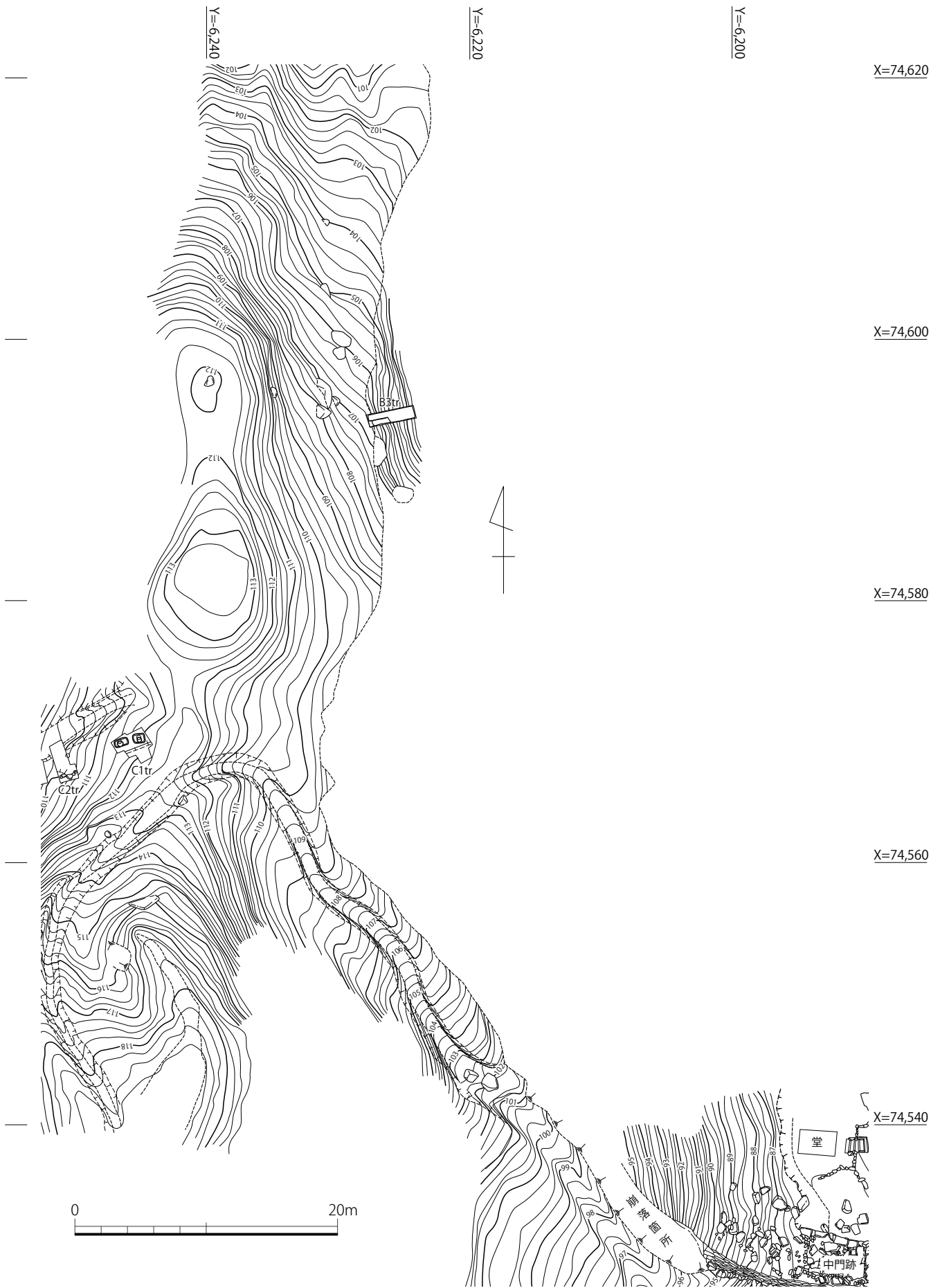
以下、分岐点から西門跡に至る平面プランを詳述する。まず分岐点からは緩やかに下りながら北側にのびていく。分岐点から約60mの標高100m付近からはその方向をわずかに西に振りながら急な傾斜が20mほど続き、分岐点から約90mの標高93m付近で北東方向へと進路を変える。その後、分岐点から約130mの標高90m付近から北西方向へとほぼ直角に折れ曲がり40mほど緩やかに下っていく。そして分岐点から約170mの標高82m付近から西方向へとS字を描く急傾斜となり西門跡へと至る。若干複雑な平面プランとなるが、元々の自然地形をうまく利用した結果と考えられる。また土塁の基底部ラインを確認していないため明確にしえないが、平面プランは直線を基本とする「折れ」を多用するものではなく曲線を基調とするものであろう。この特徴は北部九州に分布する古代山城に多くみられることである。

北西外郭線東側の平面プランで特徴的な構造は標高90m前後付近にみられる。この地点は土塁線が北西側に大きく張り出す縄張りを採り、いわゆる雉城に類似した構造となる。ここからの眺望は素晴らしく、眼下に京都平野や遠く周防灘を望むことができる。また土塁の天端は200㎡ほどの平坦面となり、望楼などの建物の存在を考えることは想像に難くない。その背面は自然の尾根を削り残した土壇となり、やはり頂部は60㎡ほどの平坦面が広がっている。

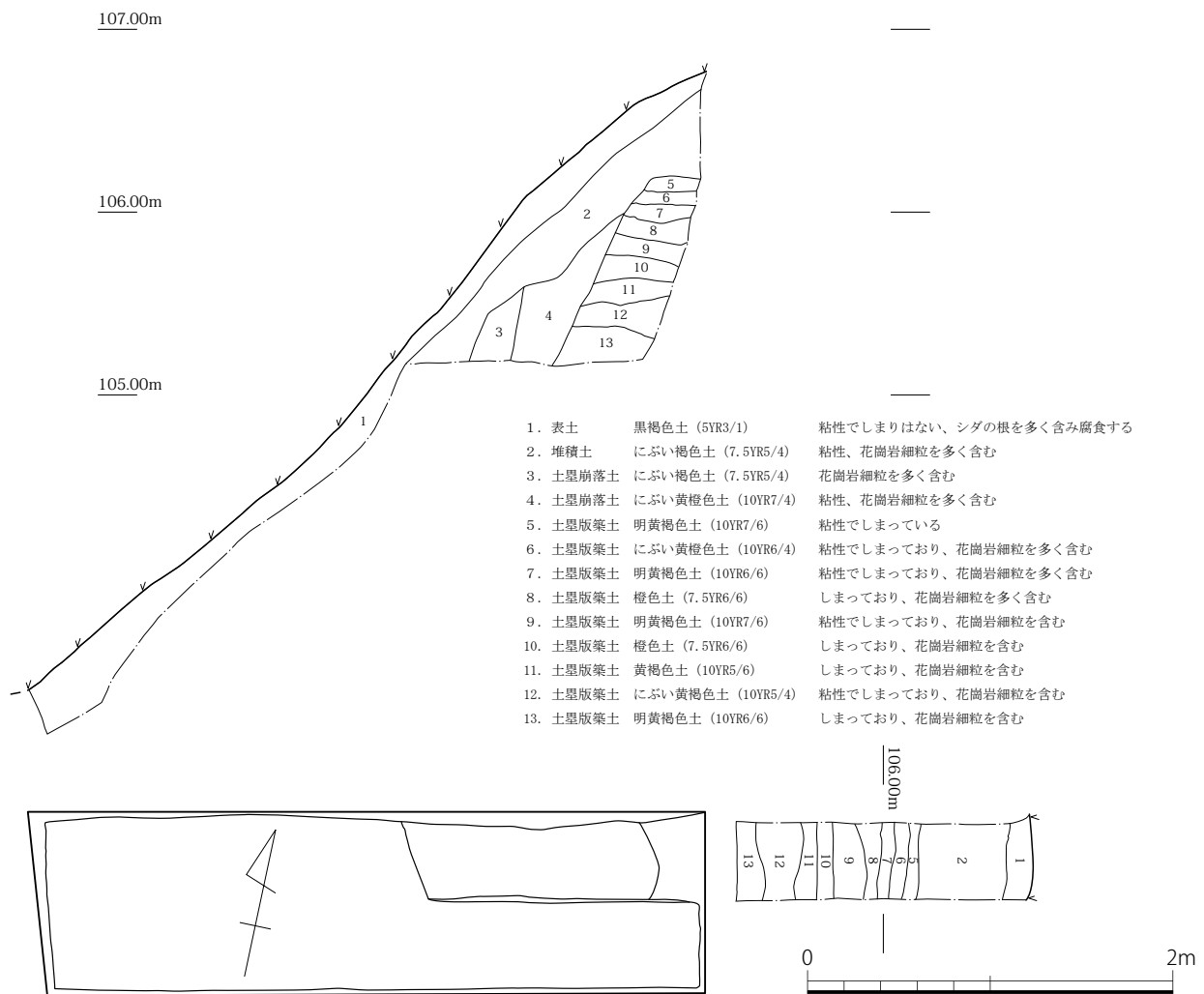
土壇状に削り残した尾根は分岐点のすぐ北側にも認めることができる。やはり頂部は40㎡ほどの平坦面となり、そこから北向きの眺望は素晴らしいものがある。ここに接して外郭線の構造を確認するためにトレンチ調査を行った。



第7図 北西外郭線西側地形測量図(北半部) (1/400)



第8図 北西外郭線西側地形測量図(南半部) (1/400)



第9図 B3トレンチ実測図 (1/40)

(2) B3トレンチ (第9図、図版4)

分岐点から北方に約30m、標高107m地点に設定した。長さ3.7m、幅1mを測る。基本層序は上から表土、堆積土、崩落土、土塁版築土となる。

表土下には花崗岩細粒を多く含んだ層が50cm程の厚さで自然堆積する。その下から互層に積まれた土塁の版築土を確認し、この地形が人工的な造作によるものが明らかになった。検出面のレベルは標高106.2mで、城内側に持たせかけるようにして築いた内托式の版築土塁である。版築土は地山に由来する花崗岩風化土(真砂)を細かく積み上げたもので、調査で確認したのは9層分の高さ約1mである。1層の厚さは数cmから10cm前後であり、粘性を持つ褐色ないし橙色系の土で花崗岩細粒(石英)を多く含んでいる。土塁の傾斜角は64度である。その外側には土塁の傾斜に沿う形状で崩落土を2層確認した。出土遺物は無かった。なお調査地は急斜面であったため、調査の安全性を考慮し土塁基底部の確認には至っていない。

第4節 西門跡の調査

(1) 調査の概要 (第10図)

西門跡は北西外郭線上の標高68m地点に所在する。ここは城内の最低所にあたる。城域にある2つの大きな谷のうち西方の谷を塞ぐ位置にあり、谷筋には貯水池跡と考えられる馬立場湿原より溪流が注いでいる。古くは「西御門」と呼ばれ、景行天皇の行宮に関連する遺構と考えられていた。その呼称は中門を基点に西側に所在することに由来する。正確には北側にあるため「北門」⁽¹⁾と呼んだ方が適切であるが、江戸時代以来の歴史的名称がすでに定着していることもあり、本報告ではこれまで使われてきた呼称を踏襲したい。西門跡の調査は、第14次、第15次調査で伐採と地形測量、3本のトレンチ調査を行い、第16次調査では石塁の写真測量を委託事業として行った。

谷幅約40mにわたり石塁が築かれており、谷のやや東寄りに門道を想定できる切り通しがあり、現在も登山道の一部として使用されている。門道の両脇には石塁が往時の状況を保っており、以下ではその現況について詳述する(第11図、図版5・6)。前面石塁の東側は長さ約6mが残っている。石積みは小口面が正方形をなす切石を多用し、縦方向に目地を通した重箱積みを基調とする。一見不安定にみえるが、部分的に大きさを換え横目地を通し、その上に横長の石材を重しとして用い安定を保っている。平均的な石材のサイズは1m四方を測り、重しとした横長の石材は長さが2mと倍の大きさになる。現状で最大10段の石積みを確認でき、最も高いところで5mほどの高さがある。東方へと連なる城壁との接続状況も容易に観察できるが、門道側は大きく崩落している。対する西側は長さ7mほどが遺存する。東側石塁と同様に小口面が正方形をなす切石を多用し、やはり縦方向に目地を通した重箱積みを多用しながら、部分的に横目地を通し横長の石材を重しとして据えていることが確認できる。一部端部を鍵形に加工して組み合わせている箇所もある。石材のサイズは1m四方のものを平均とするが、上方に使用する石材は若干小ぶりになることが認められる。現状で最大8段の石積みを確認でき、最も高いところで4mほどの高さがある。門道側は東側石塁と同様に大きく崩落している。西側も崩落が著しい。城壁へと接続する地点には巨大な岩壁がありその基部に沿って若干の石積みが残っていることから、西側石塁は往時は30mほどの規模を持っていたことが想定できる。

一方の背面石塁は前面石塁と比べると小ぶりで加工の具合も十分でない石材を用いている(第12図、図版6)。東側は基部に沿うように長さ1m程の横長の石材が一部連なって据えられている状況を確認できる。後述するようにこの石列に沿ってトレンチを設定し発掘調査を行った。門道寄りには比較的大ぶりで加工を施した石材を使用し、現状で最大4段、高さ1.2mほどの石積みを確認できる。対する西側も基部に沿って石材が据えられているが、その列は門道寄りを除きあまり明確でない。列をなす門道寄りには比較的大ぶりの石材を用いた石積みが残り、現状で最大7段、高さ約2mを測る。よく観察すると列石材を転用したと思われる上縁をL字形に切り欠いた切石を用いている(図版7-1)。このことは北西外郭線が、工事過程における城域の計画変更により急ごしらえされたことを考える1つの根拠にもなっている。

石塁の幅は約9mで一定の規格性を認めることができる。石塁は谷を塞ぐように横断していることから夾築式の構造となり、断面形は台形状を呈する。平面プランは門道部の崩落が著しく厳密にはいえないが、谷筋に対してほぼ直交するように築かれている。ただ規模が大きい西側石塁は途中で外側に張り出すように角度を変えながら斜面を駆け上がっていく。したがって城内と城外の比高差も大きく、城門が本来備えもつ防御機能を有した縄張りが採られているといえる。

Y=6,240

Y=6,260

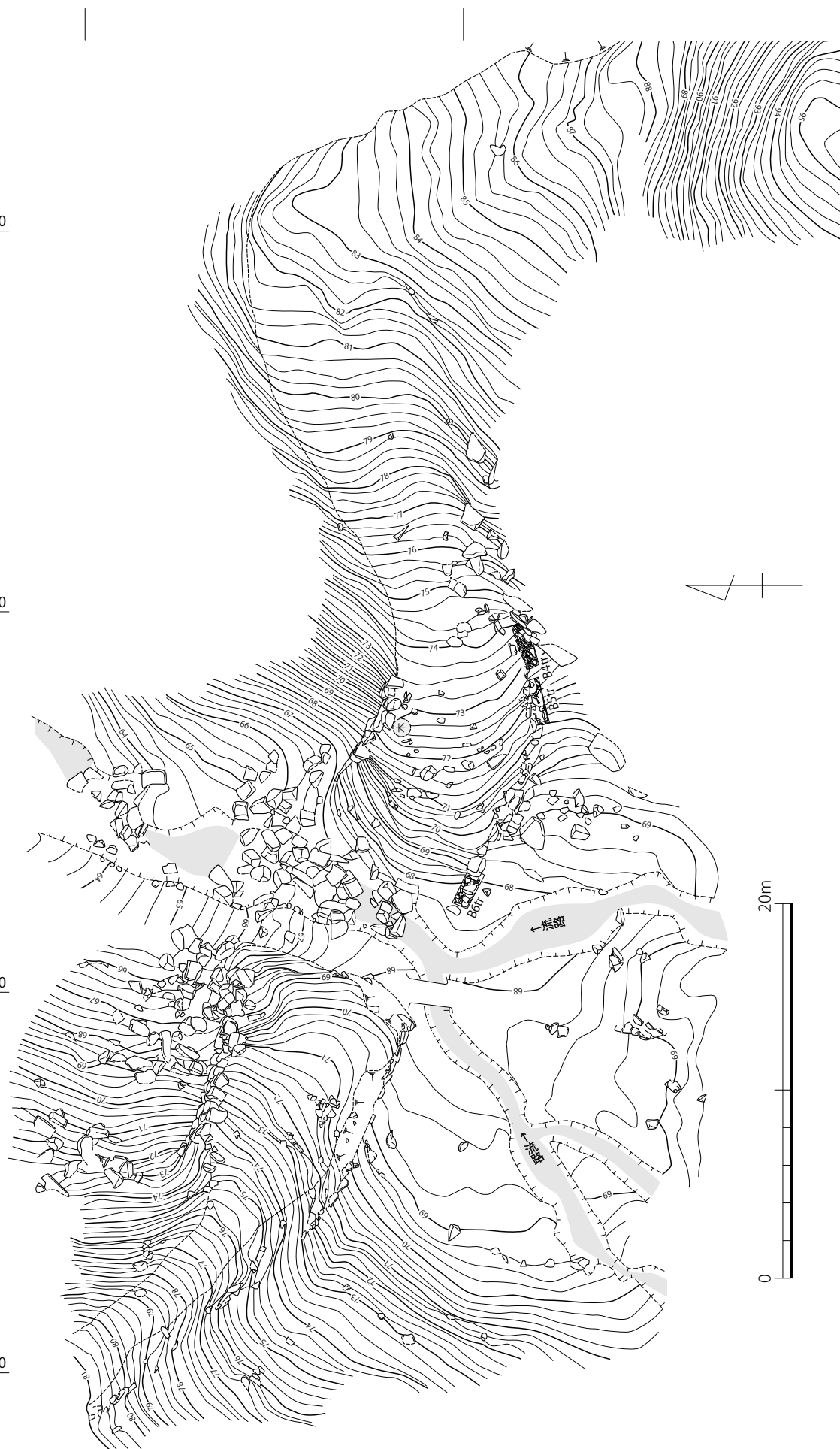
Y=6,280

Y=6,300

X=74,720

X=74,700

X=74,680



第 10 図 西門跡周辺地形測量図 (1/300)

門道部と推定される切り通しには現在溪流が注いでいるが、ここには東西の石塁から多くの石材が崩落し積み重なっている。また上流から地山の花崗岩に由来する風化土（真砂）が運ばれて厚く堆積している。したがって本来あったと思われる城門の規模や構造は分からない。同様に大きな谷筋のためかなりの水量が流れ込んでくるが、水門の構造等もはっきりしない。なおこの切り通しでは、西側石塁の断面に多くの人頭大の塊石が土と一緒に混ざり合っている状況をつぶさに観察することができる（図版7-2）。なお第14次調査中に溪流より須恵器の小片を採集した（第15図、図版18、表1）。

須恵器 1 は蓋で口縁端部の小片である。端部は折り曲げ、丸く仕上げている。残存高0.8cmを測る。8世紀の所産である。

(2) B4トレンチ（第13図、図版8）

B4トレンチは東側の背面石塁に沿って設定した。反対側にはすぐ岩盤が迫っており、北西側外郭線を東へと向かう登城道を想定できたため調査を行った。トレンチは長さ3.3m、幅1mで、基本層序は上から表土、堆積土、整地土になる。

表土下にはしまりが無い灰色系の土が自然堆積し、その下から互層に積まれた整地土を検出した。検出した整地土は最も層をなすところで5層分を確認した。1層は10cm前後の厚さで、粘性をもった褐色系の土を使用する。その下は花崗岩の岩盤となるが、表面は節理が走っているため上面のレベルは一定しない。石塁を築きやすくするため、整地を行って表面を平らにしていることが分かる。なお表土より土師器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

(3) B5トレンチ（第14図、図版8・9）

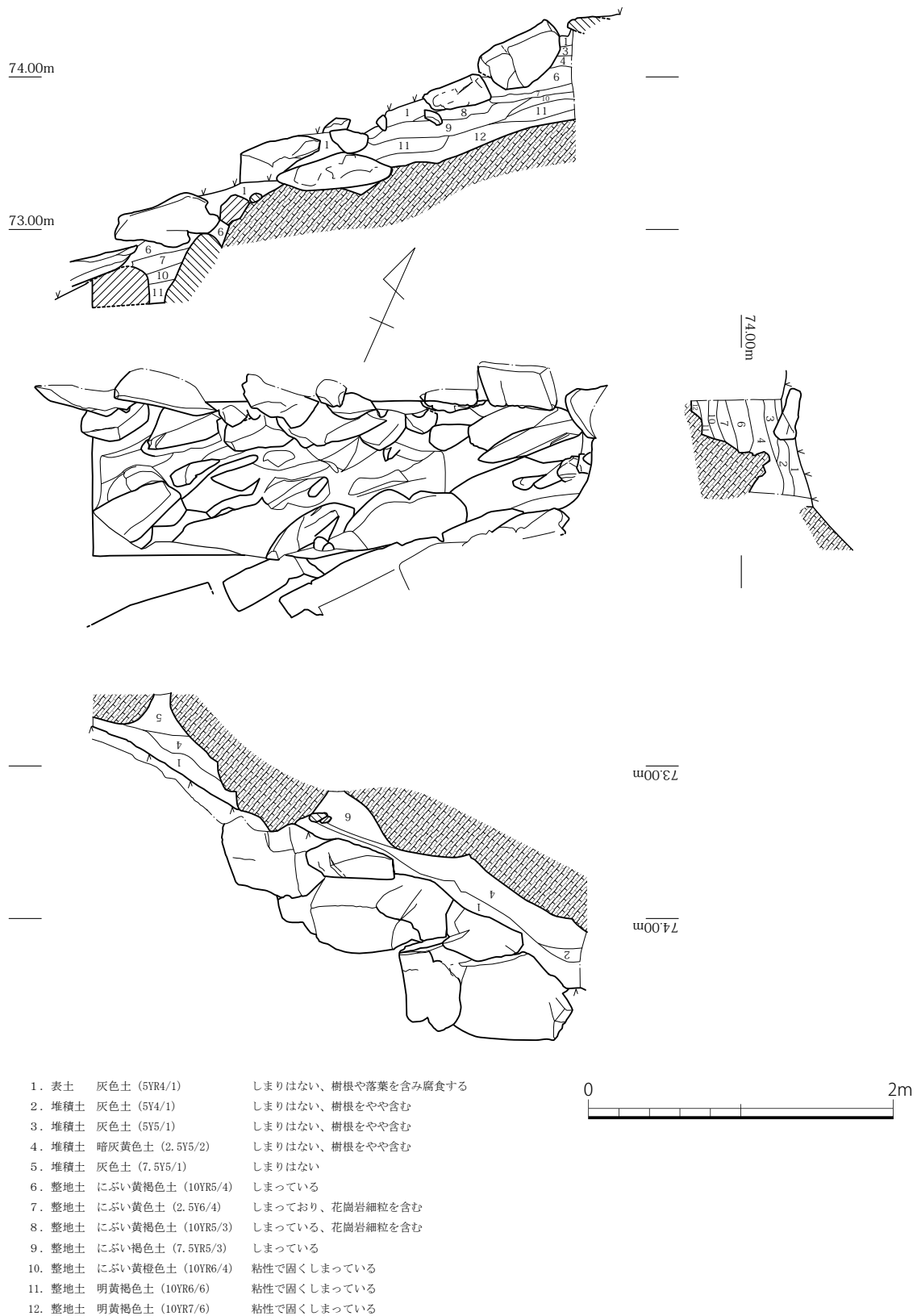
東側の背面石塁に沿った標高71m付近、B4トレンチの若干下方に設定した。調査前は長さ70cm前後の石材を用いた4段の石積みが残っており、その状況からさらに地下に埋没している状況がうかがえた。このことより東側の背面石塁の石積みの規模、構造を把握することを目的として調査を行った。トレンチは長さ2.6m、幅0.7mで、基本層序は上から、表土、堆積土、旧表土、岩盤風化土となる。

トレンチ南壁の土層（図版9-1）では、表土下に灰黄褐色をなす自然堆積層を確認した。その下位には褐灰色の層がやや厚く均等に堆積するが、その堆積状況と土色、質感より旧表土であると判断した。この層からは10世紀前後の年代を付与できる後述の須恵器片が出土した（第15図、図版18、表1）。旧表土の下位は岩盤となり一部は風化土（真砂）と化していた。一方石積みが残る北壁に目を転じると、当初露出していた石積みの下位から数段の石積みを検出した。下位の石材は地山の岩盤を階段状に成形した直上に据えていることを確認した。石積みは前面石塁と同じように縦目地を意識した重箱積みを基調とするが、横長の石を重しとして用いその強度を保持していたとうかがえる。なおトレンチの北壁に沿って岩盤上に掘り込んだ柱穴（SP001）を1基検出した。長辺が30cm程の方形を呈し、埋土はしまった黒色土1層のみであった。その機能は明確でないが、岩盤をうがち工事用の柱を据えた痕跡と考えることもできよう。

須恵器 2 は高台付碗。体部から高台部にかけての小片で、復元底径7.4cm、残存高3.1cmを測る。ロクロナデ成形し、外面は一部回転ヘラ削りをする。器壁は粗れている。形状から10世紀前後の所産と考えられる。

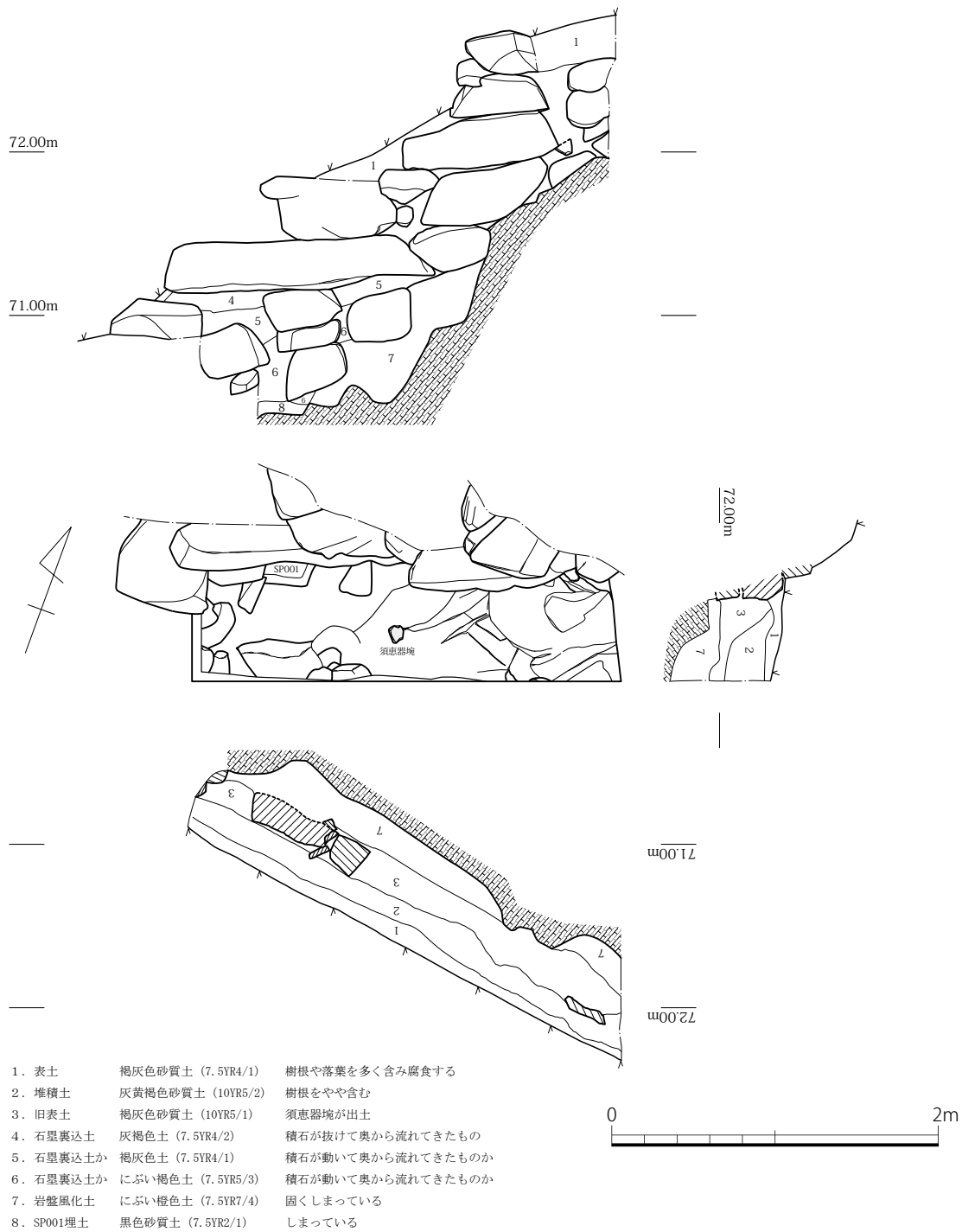
(4) B6トレンチ（第16図、図版10）

B6トレンチは東側の背面石塁の最も門道寄り、標高68m付近に設定した。門道側に面をなす3段の石積みが城門の東壁隅石の可能性があり、それを明確にすることを目的として調査を行った。トレンチは長さ2m、幅1mで、基本層序は上から表土、堆積土、岩盤風化土となる。

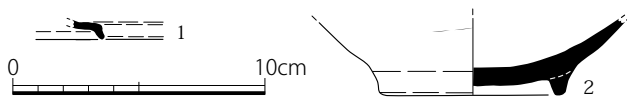


第 13 図 B 4 トレンチ実測図 (1/40)

すぐ脇に溪流が注ぐため、表土下には 15 ~ 40cm の厚さで黄褐色系の砂層が堆積していた。その下位には部分的にはあるが、石罫より流出したと思しき灰褐色土が認められた。一方トレンチを 20cm 程掘り下げたところで上部からの転石と思われる長さ 80cm 程の石材を検出した。この石材が障害となり



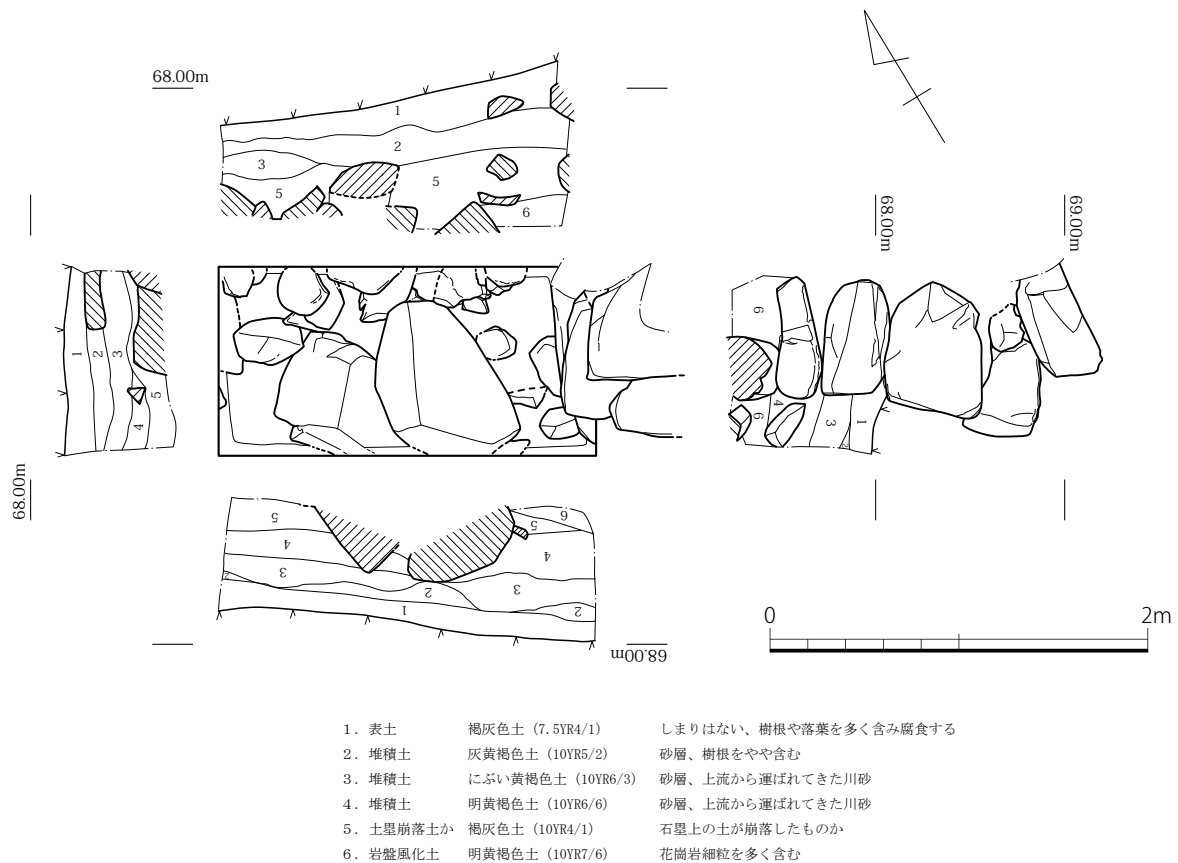
第14図 B5トレンチ実測図 (1/40)



第15図 西門跡出土須恵器実測図 (1/3)

十分な調査はできなかったが、トレンチ東壁の標高 67.4 m 付近で岩盤の風化土層を確認し、その上に調査の発端となった石積みが据えられていることが明らかになった。このことから、トレンチ

内で検出した転石の下位も岩盤風化土であることが予想されるため、当初想定したようこの石積み西門跡の東壁隅部と考えることはあながち間違いではなかろう。しかしながら使用されている石材が若干小ぶ



第 16 図 B 6 トレンチ実測図 (1/40)

りで調査面積もわずかであることから、その結論は今後の調査に期すことにしたい。なお出土遺物は無かった。

註

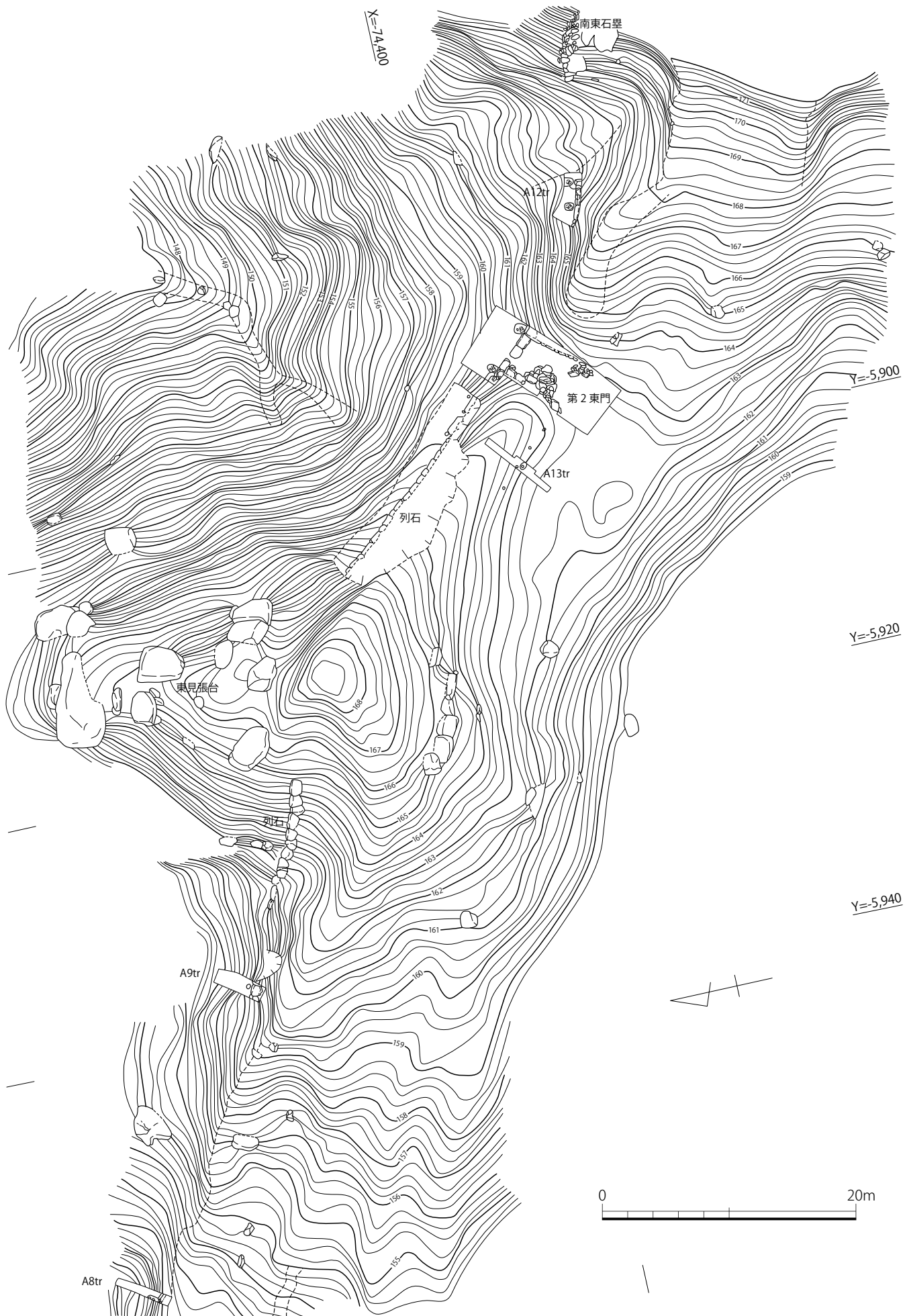
(1) 定村責二は東門を北門と呼び換え、現在の第 2 東門を東門としている。

行橋市教育委員会 1975 『行橋市の文化財 第 1 集』

第 5 節 第 2 東門跡の調査

(1) 調査の概要 (第 17・18 図、図版 11・12)

第 2 東門跡は東門跡の南東約 200 m、標高 162 m 地点の尾根の緩斜面に築かれた城門である。この城門は昭和 46 年 (1971) に定村責二らの踏査⁽¹⁾によって見つかった。平成 5 年度の第 1 次調査時に外郭線調査の一環としてトレンチ調査を行い、その後、第 6 次から第 10 次まで継続して発掘調査を行った。その結果、門道の両側壁の石材が崩落していたことが分かった、よって調査では崩落状況を記録しながら掘り進めた。その結果、南壁側は門道床面まで検出できたが、北壁側は崩落の危険性があったため完掘しなかった。検出した門道の規模は、幅は前面で 3.3 m、背面で 3.5 m、長さは 5.5 m である。壁面は最も高い部分で 3.4m を測る。門道部は花崗岩の岩盤を削った後に整地し傾斜を緩やかにしている。しかし城門を入った正面には急傾斜の岩盤を意図的に残し、城内への侵入を阻む構造となっている。なお城門建物の痕跡は確認できなかった。往時の姿をとどめた石積みはわずかであったが、中門跡や西門跡の石塁と同様に布積みと重箱積みが混在することが看取できる。出土遺物には後述する須恵器長頸壺片などがあり、



第 17 図 第 2 東門跡周辺地形測量図 (1/400)

その編年観より7世紀第3四半期頃には築造されていた可能性が高いと考えられる。

第1章第1節でも述べたように、平成24年度に今後の整備の基本方針となる「整備基本設計」が示された中で、第2東門跡は調査が最も進んでいる城門跡であることから近い将来に復元的修理を行う対象となった。このことから第16次調査では、調査が十分でなかった北側壁を中心に行うこととした。上述のように崩落の危険性があったため、調査では遺構の崩壊や安全に十分配慮しながら慎重に作業を行った。

(2) 北側壁

今回の調査でも前面から約4mの地点は下位の崩落石材をはずすことによって遺構が崩壊するため調査を先送りにしたが、その点を除けば北側壁の遺存状況をおおよそ明らかにすることができた。最もよく遺存するのは前面隅石で、基盤石を含め6段の石積みが残る。その高さは前面で2.45mを測る。門道上でも平均4段ほどの石積みが残っており、石積み技法は南側壁の調査から指摘されたように縦方向に目地を通す重箱積みを基調とする。石積みの上方の壁面は遺構を損なう可能性があるため、若干の崩落土を除去したに留まっている。前回調査が行われた南側壁の状況と併せて考えると、側壁に使用された石材は壁面となる1石のみで、中門跡や西門跡の石塁でみられる裏込め石は用いない。側壁の構築は連なる土塁の築造と連動しており、側壁を一定の高さに積み上げた後、それを堰板の代用とし中に土を充填したものと考えられる。これを4m程の高さになるまで繰り返し、門道の側壁とそれに連なる土塁線を完成させたのだろう。

(3) 出土遺物(第19・20図、図版12・18、表1)

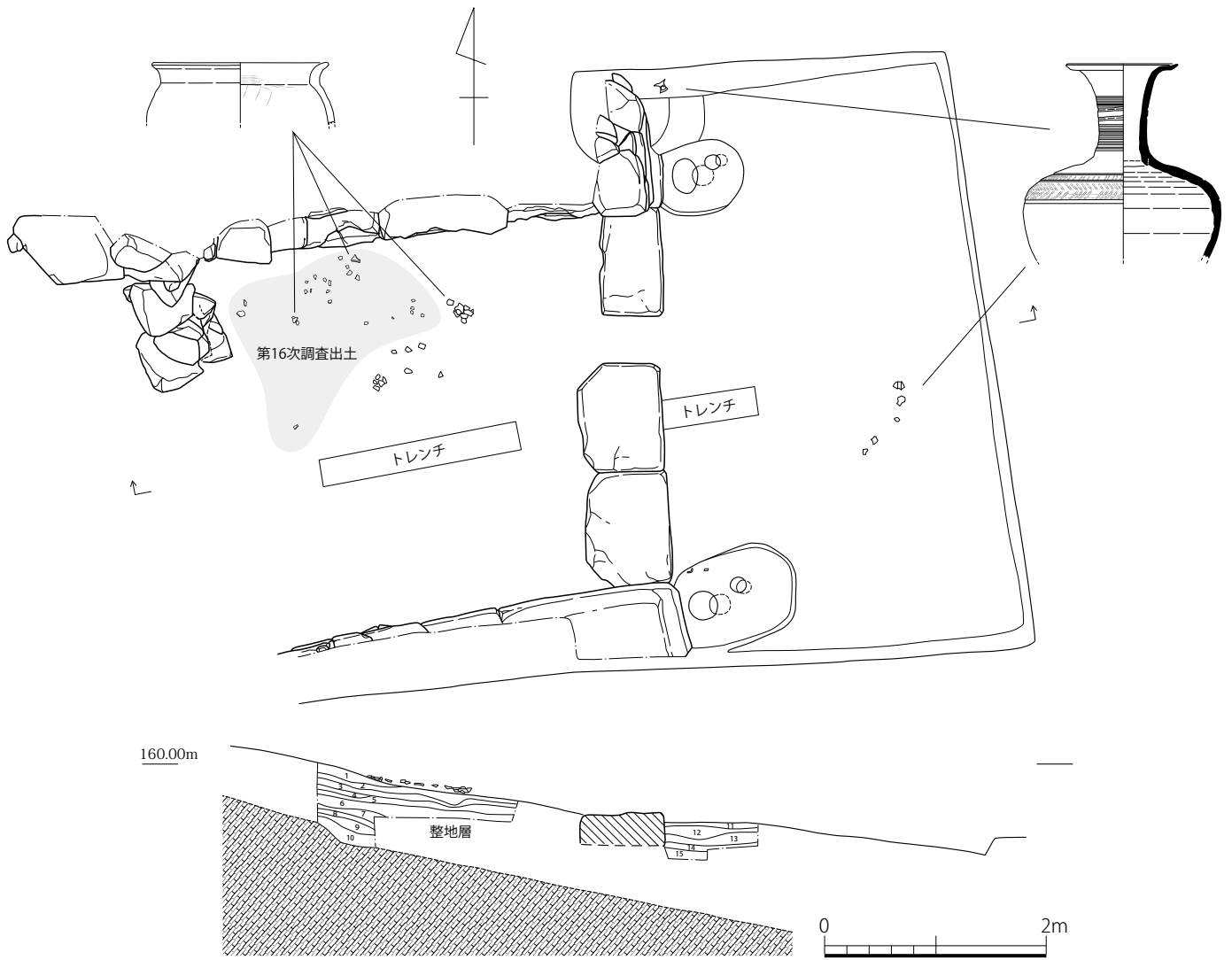
第2東門跡では前回までの調査で、門道やその前面を中心に土師器と須恵器の小片がみついている。その主だったものは既に報告済みではあるが、ここで再度報告を行いたい。それは今回の調査で崩落した石材を外したところ、新たに土師器や須恵器の小片を検出したためである。その多くは門道前面より3m前後の北側壁に近い付近から出土した。いずれも整地された門道の直上ないしそれに極めて近い、標高160m付近より検出した。この中に新たな個体は見い出せなかったが、既報告分の遺物と接合するものがあるため、以下にその内容を詳述する。

土師器 3は甕。口縁部から胴部にかけての破片で、第9次調査で門道床面から出土した。第16次調査でも接合する同一個体の小片が複数みついている。口径は16.0cmに復元でき、残高は5.6cmを測る。ヨコナデ成形後、内面はヘラ削りで器壁を調整する。7世紀の所産と考えられる。

須恵器 4は坏蓋。口縁部の小片で、第8次調査で門道の埋土から検出された。今回の調査でも同一個体の可能性が非常に高い小片を門道床面の直上より検出した。小片のため反転復原して図示できないが、残高3.7cmを測る。形状から器高に比して口径が大きくなる6世紀末頃の編年観を付与できる。5は長頸壺。第1次のトレンチ調査で北側壁の前面崩落土中より口縁部から頸部にかけての破片が出土し、第9次調査では門道前面の床面から胴部片が出土し両者が接合した。口径は10.2cm、胴部最大径17.9cmに復元でき、残高は17.8cmを測る。やや開き気味に立ち上がる頸部を胴部に差し込んで接合する。口縁部は外方にほぼ直角に折り曲げ、端部をわずかにつまみ上げて仕上げる。頸部にはカキメが施され、中位に2条の沈線がめぐる。胴部は最大径を肩部に置くが、稜をもたず丸みを帯びた形状となる。肩部は3本の沈線で区分され、その間に櫛状工具で斜め方向に一段ずつ向きを変え3段に刺突文が施される。7世紀第3四半期に位置づけられる。

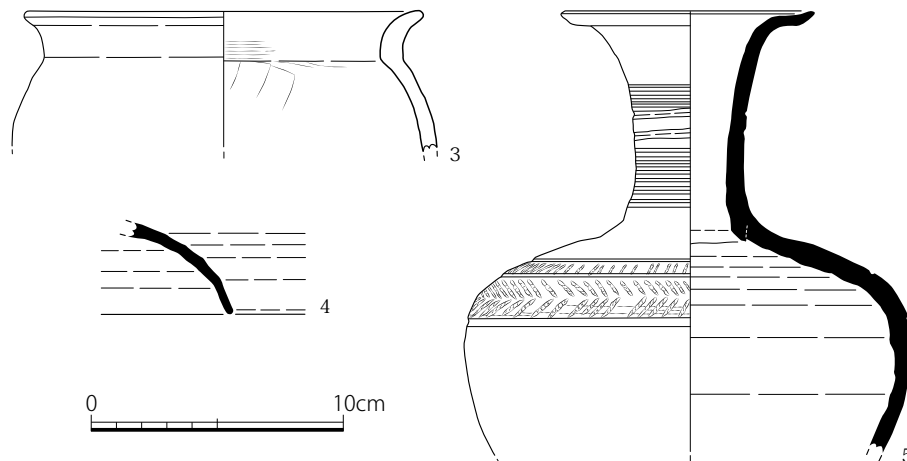
註

- (1) 定村貞二 1983「御所ヶ谷神籠石」(小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』(日本城郭史研究叢書10) 名著出版)



- | | | | |
|--------------------------|------------|---------------------------|--------------|
| 1. 整地土 明黄褐色土 (10YR6/8) | 粘質土と砂質土の混層 | 9. 整地土 明黄褐色土 (10YR6/6) | 粘質土 |
| 2. 整地土 明黄褐色土 (10YR6/6) | 粘質土と砂質土の混層 | 10. 整地土? 黄褐色土 (10YR5/6) | 粘質土、地山の可能性あり |
| 3. 整地土 にぶい黄橙色土 (10YR6/4) | 砂質土 | 11. 整地土 灰黄色土 (2.5Y7/2) | 花崗岩の粉末のような土 |
| 4. 整地土 黄褐色土 (10YR5/6) | 砂質土 | 12. 整地土 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) | 花崗岩を砕いたような土 |
| 5. 整地土 明黄褐色土 (10YR6/6) | 砂質土 | 13. 整地土 明黄褐色土 (10YR6/6) | 花崗岩を砕いたような土 |
| 6. 整地土 黄褐色土 (10YR5/8) | 粘質土と砂質土の混層 | 14. 整地土 にぶい黄橙色土 (10YR5/4) | 砂質土 |
| 7. 整地土 黄褐色土 (10YR5/6) | 粘質土と砂質土の混層 | 15. 整地土 にぶい黄橙色土 (10YR6/4) | 砂質土 |
| 8. 整地土 にぶい黄橙色土 (10YR6/4) | 粘質土 | | |

第19図 第2東門跡遺物出土状況図 (1/60)



第20図 第2東門跡出土土器実測図 (1/3)

第6節 中門跡背面の調査

(1) 調査の概要 (第21図、図版13・14)

中門跡は城域にある2つの大きな谷のうち東方の谷を塞ぐ位置にある。標高85mのこの地点は、谷が狭まり上流から注ぐ2つの溪流が接続するところでもある。中門跡の石塁、特に西側のそれは前面を2段に構築し下段に暗渠式の通水溝(水門)を設けており、国内の古代山城では他に例をみない独特の形状をしている。この石塁は御所ヶ谷神籠石の代名詞的な存在であり、日本の古代山城を代表する遺構として広く知られている(巻頭図版1)。

この背面には急峻ではないが馬の背状の尾根が発達し(図版13-1)、東西それぞれに小さな谷を形成し上述の溪流が中門跡へと注いでいる。東側の谷筋に注ぐ溪流は遺跡の散策路と接しており、その道はやがて「立岩」と呼ばれる花崗岩の巨石がある谷地へと至る。調査以前よりこの尾根には花崗岩の露頭を観察する事ができ、位置的なことを鑑みても中門跡の石塁はここで切り出した石材を用いて築かれたものと想像することができた。このことから中門跡の背面を古代の石切場跡と仮定し、第14次調査として尾根周辺の伐採、下草刈りを行い、平板による地形測量調査を実施した。また第14次調査に先立つ平成20年度には市内の遺跡分布調査の一環で御所ヶ谷神籠石における遺構の分布調査を行った。その中で、中門跡背面の東西の谷筋それぞれに谷を塞ぐようにして築かれた土堤状の遺構を確認していた。この遺構は貯水池跡と考えられている「馬立場」の石塁と類似し、中門跡との位置関係から東側の谷筋で確認したものを「中門南東石塁」、西側の谷筋で確認したものを「中門南西石塁」と呼称することにした。第14次調査ではその実測調査も併せて行った。

伐採の結果、尾根には予想した以上に花崗岩の露頭があることが分かった。そしてその表面にはシーティング節理⁽¹⁾によるほぼ水平に連続する割れ目を多く確認することができた。割れ目の深度には大小が認められ、中には10数cmに達するものも見受けられた(図版14-2)。また尾根西側の標高90~96m付近には、石材を切り出したような不自然な形状をした露頭を多く確認する事ができた。以上の観察から中門跡の背面において御所ヶ谷神籠石を構築するために石材を切り出していたことはほぼ間違いないことと思われる。石材の切り出しは中世以降に普遍的にみられる矢穴を用いたものではなく、この山塊をなす花崗岩特有の節理を利用していたものと考えられる。すなわち鑿状の鉄器などを節理の割れ目に打ち込むことによって石を切り出していたと想像できる。節理はほぼ水平に走ることから、石塁や列石を築くのに利用しやすい方形状の石材を採取することは比較的容易であったと思われる。この方法は石材の特性を活かした最も理にかなったものである。

尾根の東側でも谷を挟んだ標高91~94m付近は広く開けており、緩い傾斜をもつことが地形測量で分かった。発掘調査を行っていないため明言できないが、このような地形は採石したものによると考えられる。この地点で特筆すべき点は、その南東側に土壇状のテラスが認められることである(図版14-3)。その基部には人頭大の塊石を用いた石組みがめぐっており、人工的な造作による地形だと考えることができる。ただこれも発掘調査を行っていないため、このテラスが土を盛ったものか、地山成形によるものかははっきりしない。

(2) 中門南東石塁 (第22図、図版16・17)

中門跡に注ぐ東側の谷筋を塞ぐようにして築かれた土堤状の遺構である。中門跡から南に約50m、標高95mにあるこの遺構は散策路に接したとても目に触れやすい位置にあるが、不思議と最近までその存在は認識されていなかった。上述のように平成20年度に行った山内の分布調査時に、後述の中門南西石

壘と一緒に発見された。

遺構の現状は溪流によって中央部を大きく失っているが、散策道に面した東側に約5 m、尾根に接する西側に約3.5 m分の土堤状の段が残っている。前面の石積みはあまり明確ではないが、よく残る西側で最大5段の石積みが残っており、1.1 mほどの高さがある。使用する石材は横長のものを基調とし、大きなもので長さ0.6～1 mくらいである。あまり加工を施しておらず、この点は馬立場石壘や中門跡の背面石壘の状況によく似ている。石積み技法は遺存状況があまりよくないため明確ではないが、大きな石材の間を埋めるようにして拳大の石材を充填することが分かる。この石壘で驚嘆すべきは溪流によって流出した断面部に前面石壘の石積みを明瞭に観察することができることにある（図版16-3）。このことより石壘の本来の高さは3 mほどありその前面は上流から運ばれてきた土砂が深く堆積していたが、ある時期に中央部が土石流で流されてしまったと想定できる。背面も同様に深く埋もれているため現状では本来の姿を想像することはできない。この東側の谷筋は水量が多く本流にあたるため、それを排水した水門もそれなりにしっかりした造りであったと考えられる。今回の調査では安全性の問題や時間的な制約もあり、断面図などを含めた精緻な図を作成することができず課題が残ることとなった。水門の構造等も含めて今後の調査に期したい。

（3）中門南西石壘（第23図、図版17）

中門跡に注ぐ西側の谷筋を塞ぐようにして築かれた土堤状の遺構である。中門跡から南西におよそ60 m、標高97 m地点にある。中門南東石壘と同じく平成20年度に行った山内の遺構分布調査時に発見された。

遺構の現状は長さ8 mほどで、西側の上端がやや流れているものの中門南東石壘に比べると旧状を保っているものと思われる。このことは西側の谷が東側の谷より規模が小さく、谷筋に注ぐ溪流の水量も少ないことによると考えられる。前面は1.6 mほどの高さをもつが、その周囲の状況から深く埋もれていると看取できる。前面の石積みは最も残るところで4段分確認できる。使用する石材は横長のものを基調とし、長さ0.5～1.1 mくらいである。あまり加工しておらず、中門南東石壘と同じく馬立場石壘や中門跡の背面石壘に使用された石材によく似ている。残存部の石積みは横方向に目地を通して積まれたものであるが、一部の観察によるものなのでそれが普遍的にわたるものなのかは明言できない。背面も上流から流れてきた真砂が厚く堆積する。よって堤の幅や断面の形状は明らかにできない。同様に水門の構造も不明である。しかしながら水量が少ないため、石組みの間から谷水がしみ出るような構造の水門（盲水門）であった可能性も指摘できる。

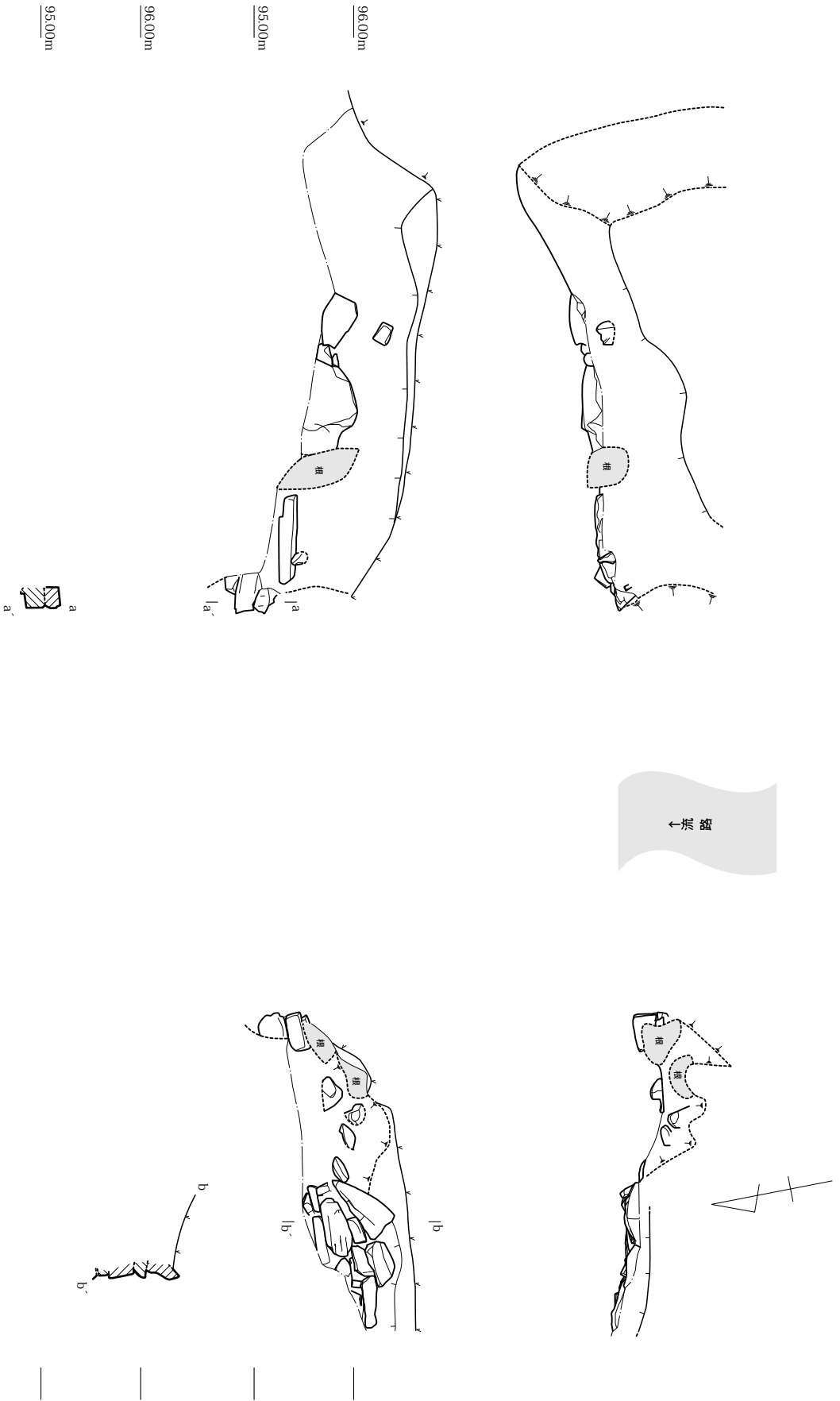
（4）採集遺物（第24図、図版18、表1）

土師器 6は坏。体部の小片で、残高2.0cmを測る。ヨコナデ成形後、外面は手持ちヘラケズリで器壁を整える。7世紀の所産と考えられる。第13次調査時に中門南西石壘前面で表面採集した。7は甕。口縁部の破片で、残高4.2cmを測る。ヨコナデにより成形する。8世紀末を前後する時期の所産と考えられる。6と同じく第13次調査時に前で中門南西石壘前面で表面採集した。ほかにも小片のため図化できないが土師器の小片を数点採集している。

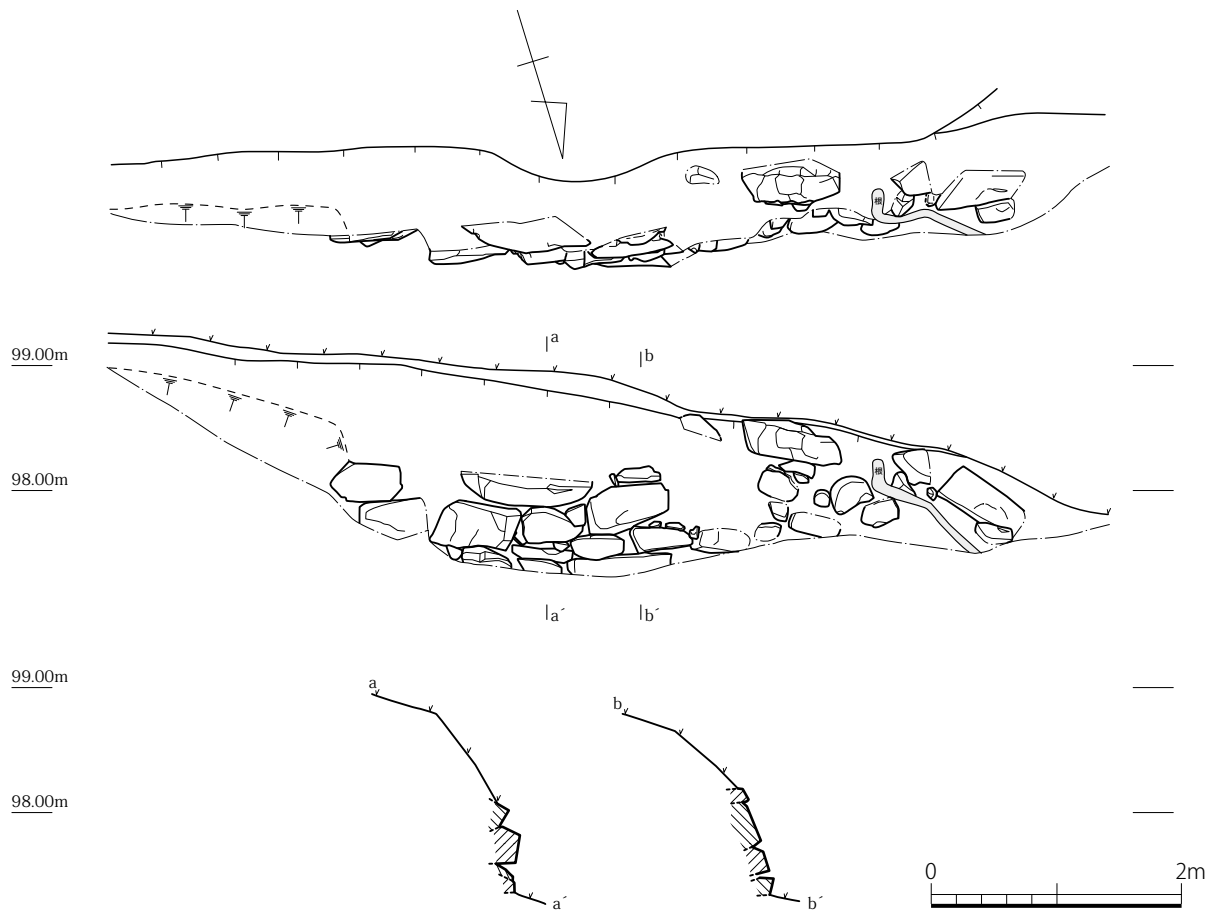
註

- （1）シーティング節理とは、花崗岩体が隆起し地表に近づいた時、上部の岩盤の荷重が軽減されて生じるほぼ水平な割れ目のことをいう。

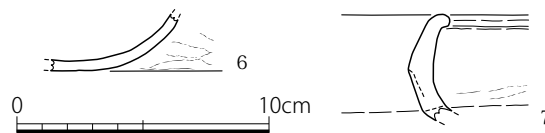
唐木田芳文 2004「花崗岩」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 上巻』行橋市）



第22図 中門南東石壘実測図 (1/60)



第 23 図 中門南西石壘実測図 (1/60)



第 24 図 中門跡背面採集土師器実測図 (1/3)

番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	西門跡採集	須恵器	碗蓋	残高 0.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内外：灰 7.5Y 5/1	口縁部片	8 世紀
2	B 5 トレンチ 第 3 層	須恵器	碗	復元底径 7.4 残高 3.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ	やや不良	微細～1mmの白色・黒色粗砂を含む	内外：灰白 7.5Y 8/1	体部～高台片	10 世紀前後
3	第 2 東門跡 門道床面	土師器	甕	復元口径 16.0 残高 5.6	内：ヨコナデ→ヘラケズリ 外：ヨコナデ	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内：明赤褐 5YR 5/6, にぶい赤褐 5YR 4/4 外：にぶい赤褐 5YR 4/4, 赤褐 5YR 4/6	口縁部～胴部片	7 世紀
4	第 2 東門跡 門道埋土	須恵器	環蓋	残高 3.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	微細な粗砂を含む	内：灰白 7.5Y 7/1 外：灰 7.5Y 6/1	口縁部片	6 世紀末
5	第 2 東門跡 門道床面・ 北側壁崩落土	須恵器	長頸壺	復元口径 10.2 胴部最大径 17.9 残高 17.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→カキメ・刺突文	良好	微細～1mmの白色粗砂を含む	内：灰白 7.5Y 7/1 外：灰 7.5Y 6/1	口縁部～胴部片	7 世紀後半
6	中門跡背面採集	土師器	環	残高 2.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ	良好	微細な粗砂を少量含む	内外：にぶい赤褐 5YR 5/4	体部片	7 世紀
7	中門跡背面採集	土師器	甕	残高 4.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内：にぶい褐 7.5YR 5/4 外：にぶい黄褐 10YR 5/5	口縁部片	8 世紀末～ 9 世紀前半

第 1 表 御所ヶ谷神籠石出土遺物観察表

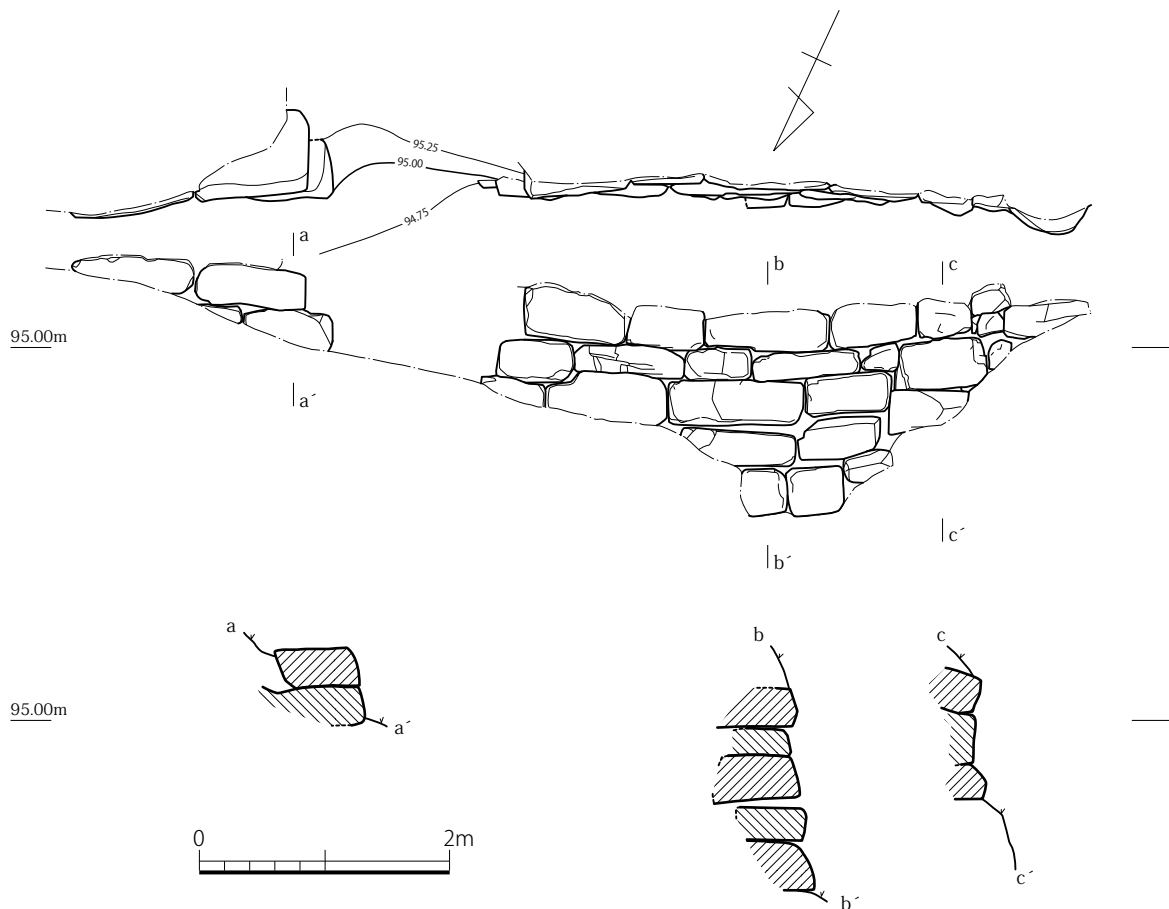
第7節 東石塁の測量調査 (第25・26図、図版17)

東石塁は中門跡から東に延びる外郭線上の谷部、標高約95m地点に位置する。中門跡と東門跡とのほぼ中間地点にあたる。その存在は古くから知られており、明治42年(1909)に伊東尾四郎、喜田貞吉、宮崎榮雅らが御所ヶ谷を踏査した際の記録に、「溪谷と覚しき辺に至りて、水門型の遺蹟を発見したり」とあるのがこの石塁のことである。平成5年の発掘調査開始以後、発掘調査や詳細な図化は行っていないが、近年石積みに若干の緩みが確認されたため、第16次調査時に実測図作成を行った。

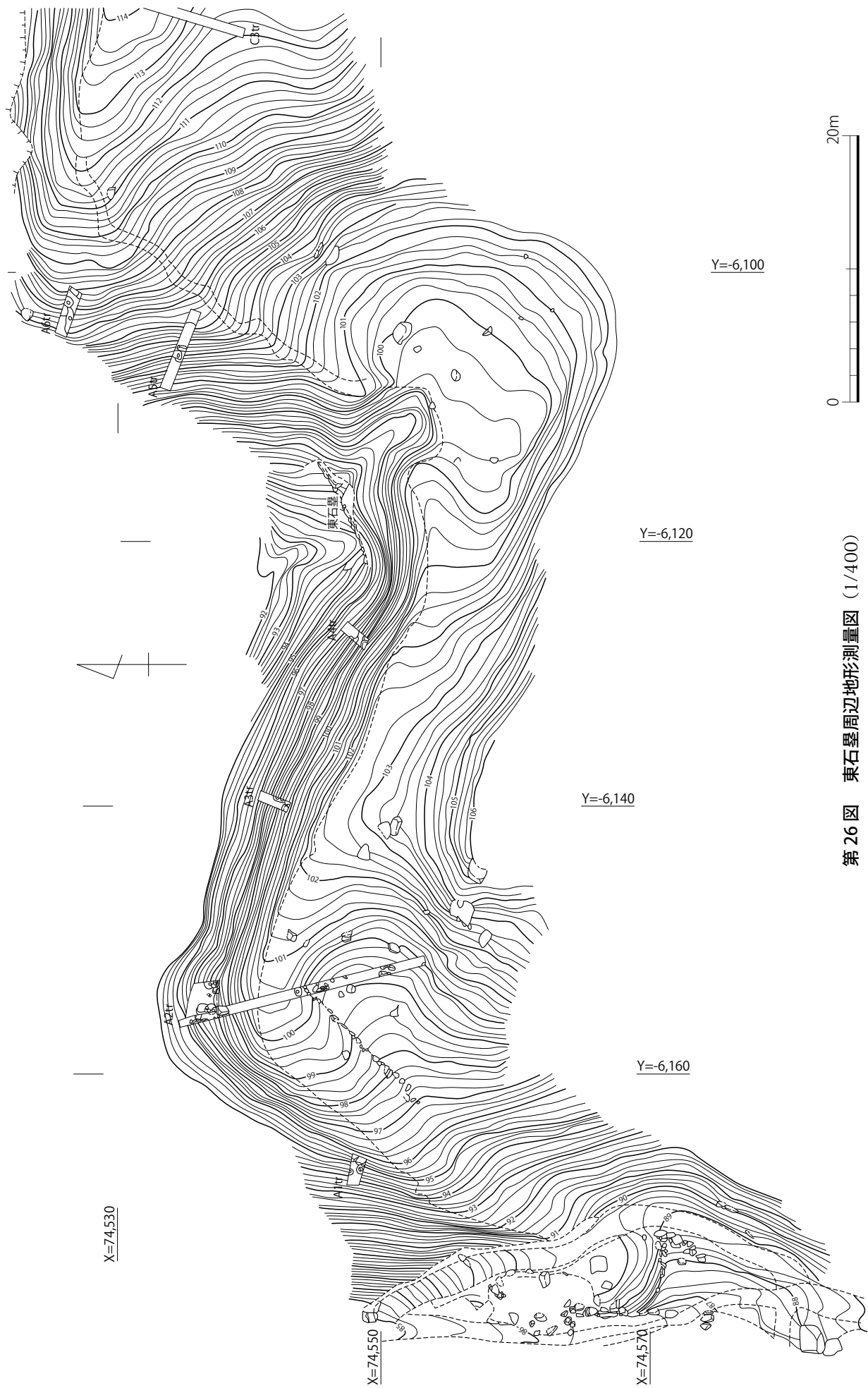
現在露出する石塁部分の長さは約8mで、東よりの部分が一部崩れており土塁背面からの入口となっている。平面形は中央部は谷筋に対してほぼ真一文字に直交するが外側は若干前面にせり出すような形状となる。ただ中門跡石塁にみられるような弧を描く湾曲ではない。石塁は直方体の切石を横方向に目地が通るように布積み(整層積み)し、一部端部を鍵形に加工して組み合わせているところも確認できる。石材の大小はあるが、石積み技法そのものは中門跡石塁に類似する。石材のサイズは一定しないが、大きいもので長さ1m、高さ35cmほどである。現状で最大5段の石積みを確認でき高さは1.6m程で、その状況からさらに地下に埋没していると思われる。露出する部分には排水口は確認できない。谷の規模より水量はあまり多くないと思われるので、石組みの間から谷水がしみ出るような構造の水門(盲水門)であった可能性も指摘できる。石塁の上部には土塁が築かれており、その幅は現状で4m程度である。

註

(1) 宮崎榮雅 1910「豊前国御所ヶ谷神籠石探検記」『歴史地理』第15巻第3号 日本歴史地理学会



第25図 東石塁実測図 (1/60)



第 26 图 東石壘周边地形測量图 (1/400)

第4章 結 語

以上、第12次～第16次に及ぶ御所ヶ谷神籠石の調査成果を報告してきた。最後に今回の調査で明らかになったこと、それによって生じる問題点などを簡潔に述べて結びとしたい。

北西外郭線については、第1次、第2次調査時に西門跡の西側で2箇所のトレンチ調査を行っている。そのうちB1トレンチでは、現存幅7.6m、高さ4.5mほどの版築土塁とその前面の柱列を確認した。特筆されるのは基底部に通常用いられる切石列石を欠くことで、このことは総延長約600mの北西外郭線が工事過程での城域の計画変更により急ごしらえされたもので、それに伴って行う予定の作業が省力されたと考えられている。この点は北東外郭線の調査で多く確認した版築土塁が、やはり計画変更によって列石を被覆したまま完成としたことと連動するものである。B3トレンチでは土塁基底部まで調査が及ばずこの点を追認する事が出来なかったが、今後の調査の進展によって明らかにされるものと思われる。

西門跡に残る石塁は中門跡のそれと比肩できることは周知されてきたところであったが、長らく未調査の状態が続いたため、それを資料として示すことはできなかった。今回の調査により西門跡の基礎資料が提示できるに至ったことは1つの重要な成果といえる。石塁は重箱積みを多用しながらも横長の石材を重しとして用いることで安定性を保ってきた。またB5トレンチの調査では地山を加工した上に背面石塁を築いたことも確認できた。また十分に明確にはできなかったが、B6トレンチで門道壁面の可能性がある石組みの調査を行ったことも1つの成果といえる。

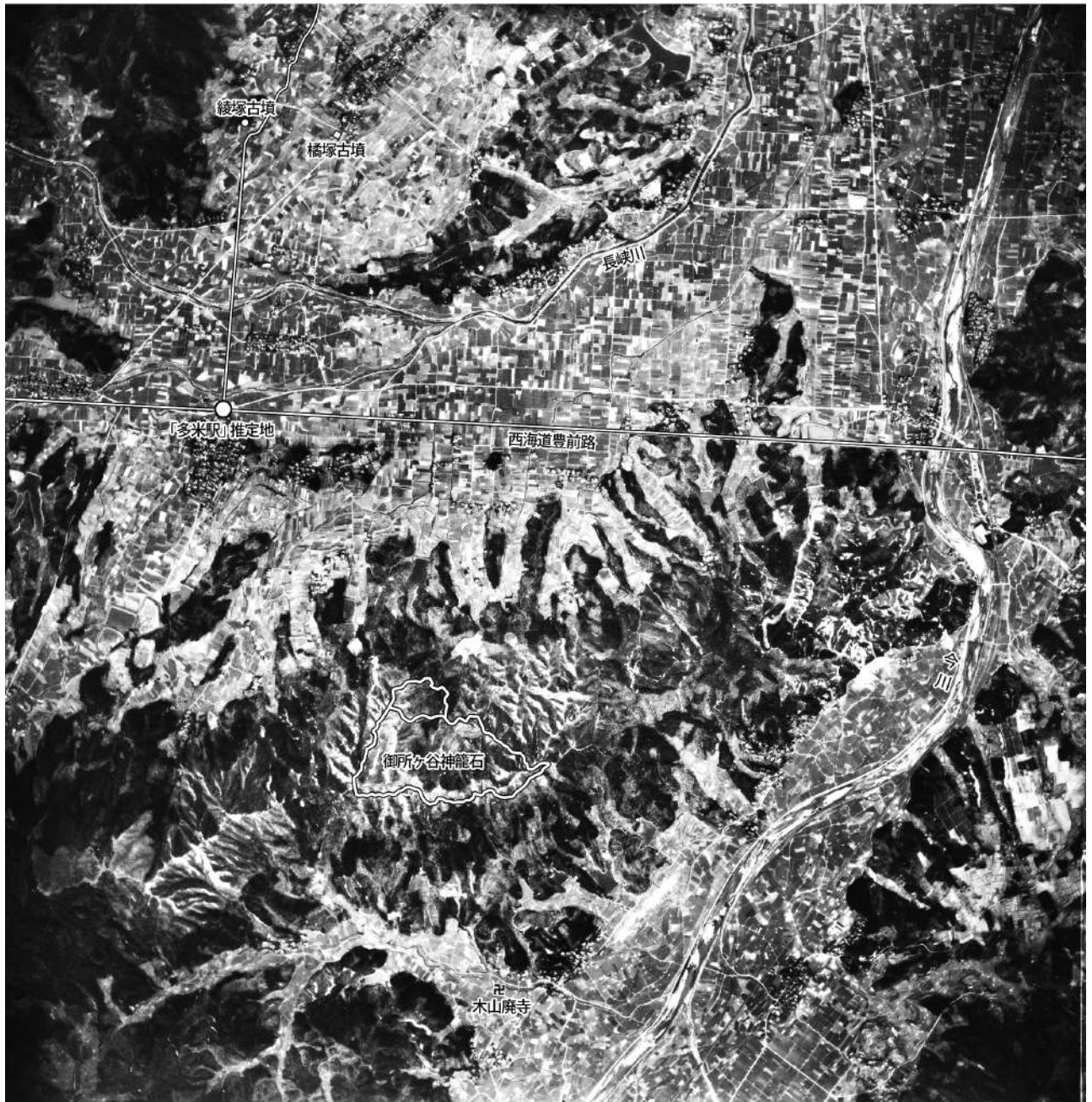
遺構の復元修理に先立つ第2東門跡の発掘調査では北壁の構造を明らかにすることができた。その過程で少数ではあるが門道床面から土器が出土し、第2東門は7世紀第3四半期頃には完成していたとする前回調査での評価を追認することができた。しかしながら城門建物が無いなどその構造については課題を残すままとなった。

中門跡背面の調査では、そこに多く露出する花崗岩の母岩より石材を切り出し、中門周辺の築城に用いた可能性を言及することができた。西門跡の背面でも同様のことがいえ、両地点共に今後も継続した調査が必要であろう。古代山城における石材の供給の問題は、石材の分析など科学的見地からアプローチする必要もあろう。またこの調査では、近年みつかった2つの土堤状遺構の実測調査を行いその現状を報告することができた。使用された石材は馬立場石塁や中門跡の背面石塁のそれに類似することから古代山城にともなう遺構と評価することができた。一方その機能については、その背後の状況から馬立場石塁で想定されているような貯水池の堰堤ではなく、谷を塞ぐように築かれていることから「砂防」機能を有したダムのようなものであったと思われる。大雨などで土石流が発生した時に、その流れが一気に中門まで到達するのを防ぐことを目的として築かれたのであろう。

これまでの確認調査は広大な遺跡を断片的に調査したに過ぎない。しかしながら一年一年新たな発見があり、今後も継続した調査、研究を行っていくことで御所ヶ谷神籠石の往時の姿も徐々にではあるが鮮明になっていくものと期待される。

本書の結びにあたり、小雪の舞う中など厳しい環境の下で発掘調査に従事していただいた作業員の方々、調査にあたってご協力いただいた地権者のみなさま、地元関係各位に感謝申し上げます。

写真図版



(1947年12月15日撮影 写真名 USA-M690-27 国土地理院発行を転載)

御所ヶ谷神籠石周辺航空写真



1. 北から見た御所ヶ谷神籠石の山並み



2. 北上空から見た遺跡主要部

1. 北西外郭線遠景
(北東から)



2. 北西外郭線より
京都平野を望む
(南から)



3. 北西外郭線の状況
(南から)

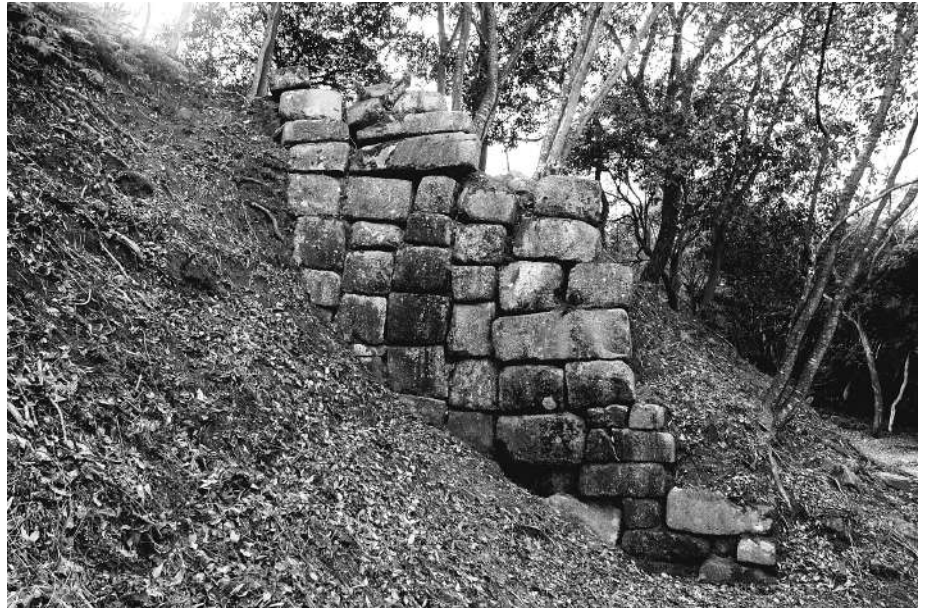




1. B3トレンチ全景（北から）



2. B3トレンチ南壁土層



1. 東側石塁（北から）



2. 東側石塁遠景
（北西から）



3. 西側石塁（北から）



1. 西側石塁遠景
(北東から)



2. 背面東側石塁
(西から)



3. 背面西側石塁
(南東から)

1. 列石転用石材
(南から)



2. 石塁断面 (南東から)



3. 城内から望む
(南から)





1. B4・B5トレンチ全景
(南西から)



2. B4トレンチ全景
(西から)



3. B5トレンチ全景
(南から)

1. B5トレンチ
南壁土層（北から）



2. B5トレンチ
須恵器出土状況



3. 柱穴検出状況



4. 柱穴完掘状況



1. B 6 トレンチ全景
(北西から)



2. B 6 トレンチ
東壁土層 (西から)



3. B 6 トレンチ
北壁土層 (南西から)



1. 第9次調査時の第2東門跡（北東から）



2 第2東門北側壁（東から）



1. 北側壁の石積み1
(南東から)



2. 北側壁の石積み2
(南東から)



3. 遺物出土状況 (東から)

1. 中門跡背面の状況
(北から)



2. 西側谷筋にある花崗
岩の露頭 (西から)



3. 東側谷筋にある花崗
岩の露頭 (東から)





1. 中門南西石塁前面の
花崗岩の露頭(南西から)



2. 節理が走る花崗岩の露頭
(南西から)



3. 中門南東石塁前面の
土壇状テラス(北西から)



1. 中門南東石塁（北東から）



2. 中門南東石塁（北西から）



1. 東側の石積み（北から）



2. 西側の石積み（北から）

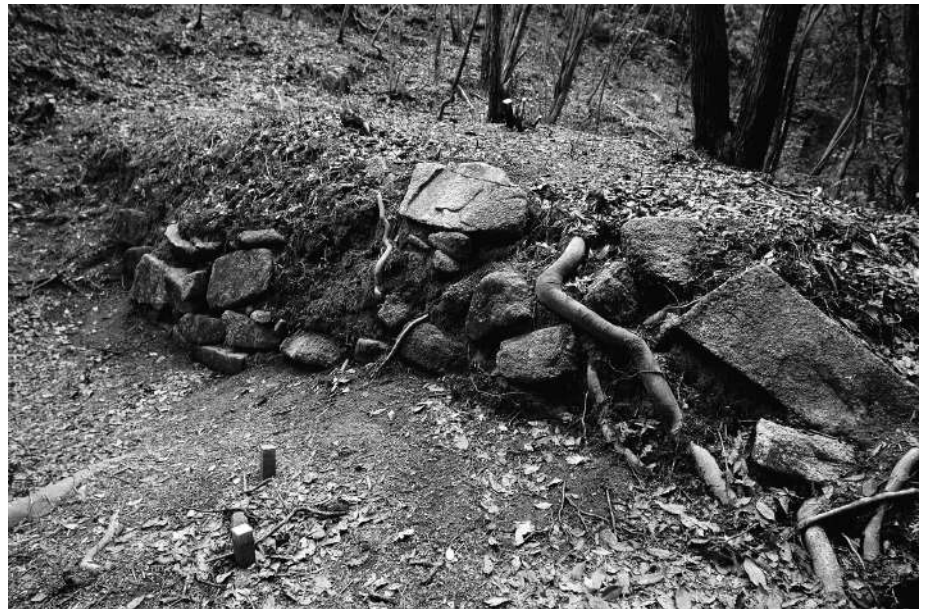


3. 断面の状況（東から）

1. 中門南西石塁
(北から)

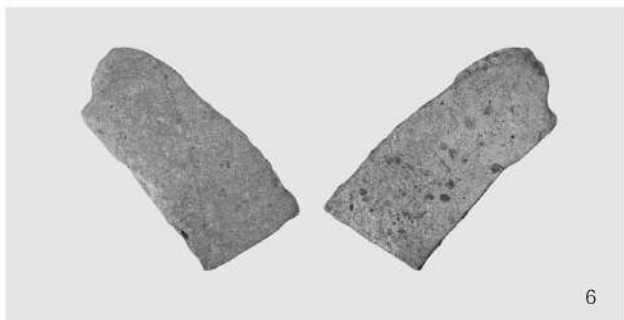
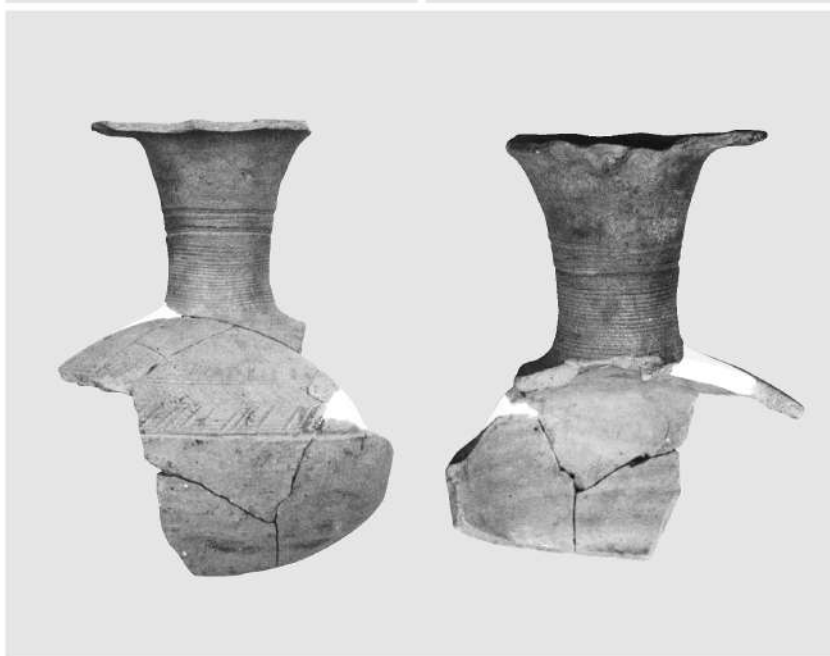
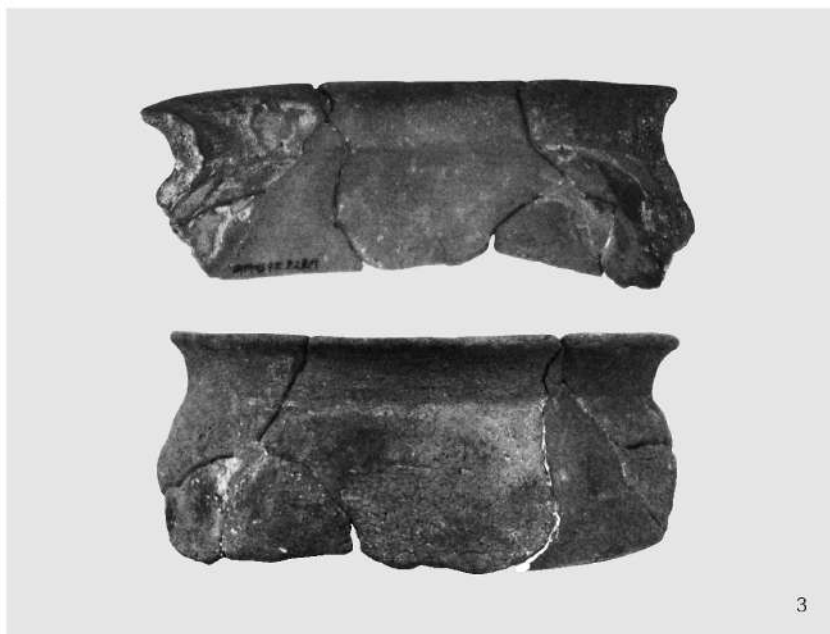
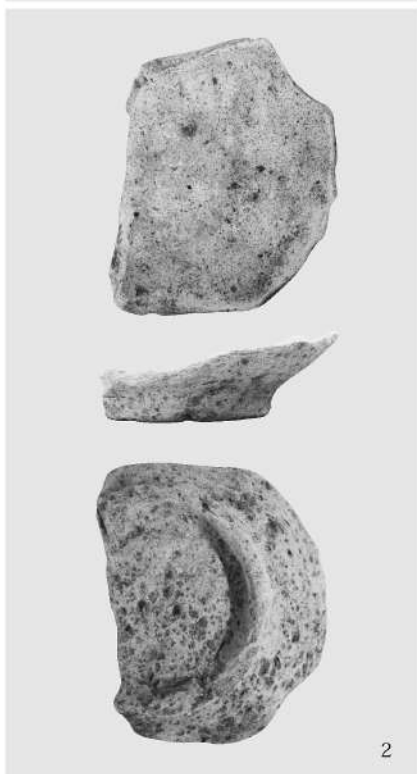


2. 中門南西石塁
(北西から)



3. 東石塁 (北西から)





報告書抄録

ふりがな	しせきごしょがたにこうごいし に							
書名	史跡 御所ヶ谷神籠石 II							
副書名	福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城の第 12 次～第 16 次調査							
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 53 集							
編著者名	山口裕平							
編集機関	行橋市教育委員会							
所在地	〒 824-8601 福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号 TEL 0930-25-1111 FAX 0930-25-1582							
発行年月日	2014 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ごしょがたにこうごいし 御所ヶ谷神籠石	ふくおかけんゆくほしし 福岡県行橋市 おおあぎつつみ 大字津積ほか	402133	14103001	33° 40′ 15″	130° 56′ 00″	20081215 ～ 20090309	4m ²	内容確認
						20091201 ～ 20100303	—	
						20110118 ～ 20110331	5m ²	
						20120216 ～ 20120329	2m ²	
						20130130 ～ 20130329	55m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御所ヶ谷神籠石	古代山城跡	飛鳥時代	土塁、石塁、城門跡	土師器、須恵器	国指定史跡			
要約	<p>京都平野の南辺を画す御所ヶ岳(標高 246.9 m)の北西麓に築かれた古代山城遺跡。外郭線の全長は 3 km に及ぶ。外郭線は版築土塁を主とし、谷部には石塁を築く。なかでも中門跡の石塁には突出した暗渠をもつ水門が築かれており、日本の古代山城を代表する遺構として著名である。</p> <p>第 12 次～第 16 次調査では、北西側外郭線の地形測量およびトレンチ調査、石塁の写真測量、第 2 東門跡の発掘調査、中門跡背面(石切場)の地形測量、東石塁の実測調査などを行った。</p>							

2014年(平成26年)3月31日 発行

史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅱ

行橋市文化財調査報告書 第53集

著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目1番1号
発行 行橋市教育委員会

印刷 福岡県行橋市大橋三丁目1番18号
はら印刷